

第9回銀華文学賞発表

銀華文学賞

銀華文学賞はおかげさまで九回を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、フランスなど海外からの応募を含め、四八二篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・都築隆広・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回も、一昨年新設した歴史小説賞を継続させていただきました。

また御遺族の御厚意により河林満賞も併せて選出させていただきました。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は五〇号以降に順次掲載させていただきます。

第九回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一三年一月二十六日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラス・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第一〇回銀華文学賞も本年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

※予選選考に当たり、小林広一氏、中野睦夫氏、東谷貞夫氏に御協力をいただきました。

当選

該当作なし

河林満賞

「白鳥ダンスクラブ」

冴場 渉（千葉県旭市）

歴史小説賞優秀賞

「弧月」 飛葉哲朗（広島県広島市）

「榎本武揚と手袋」

吉田満春（千葉県山武市）

優秀賞

「父の理想郷」

来の宮あんず（東京都江東区）

「夏の揺曳」

室町 眞（東京都杉並区）

「赤い眼」

神通明美（富山県富山市）

奨励賞

「痣―かぎりなく深く透明な赤・俊子―」

土岐田 耕（大阪府豊中市）

「封印」

井上理博（神奈川県横浜市）

「成るがままに」 星野 透

（埼玉県所沢市）

「悪意」 成瀬健太郎

（神奈川県藤沢市）

「蝶舞う村へ」 遠藤秀紀（神奈川県川崎市）

「藤の家」 馬込太郎（静岡県浜松市）

「太鼓供養」 河野つとむ（神奈川県横浜市）

「通達アルファ」 北澤佑紀（香川県高松市）

「汚れたうさぎ」 山上弓人（岡山県岡山市）

歴史小説奨励賞

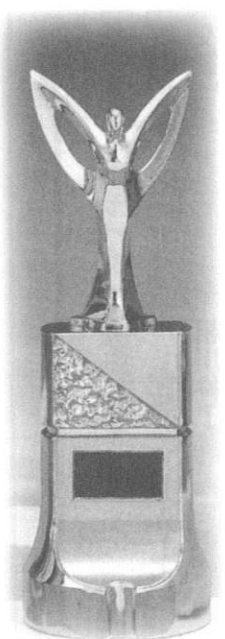
「越南の仲麻呂」 佐々木忠弘（千葉県印西市）

「サムライ養鶏」 藤澤茂弘（愛知県名古屋）

「惣一郎戊辰戦争従軍記」

大森耀平（栃木県足利市）

「国境」 白井 康（愛知県名古屋）



河林満賞記念トロフィー

パワー不足、マンネリ化か

五十嵐 勉



第九回銀華文学賞は、応募総数が四八二篇で、昨年より七〇篇ほど増加した。これに比例するように二次、三次通過者は増えて、そのあたりのレベルはかなり上がったが、トップクラスが低迷した。文学賞の場合、応募総数が増えればトップレベルも高くなるかという点、まったくこれが当てはまらない。これは「群像」や「文学界」など他の文芸誌を見てもそうである。

いい作品や惚れ込んだ作品には、他の選考委員が反対しても何が何でも推すというパワーが内蔵されているものだが、今回はそういう作品にはお目にかからなかった。選考でも委員どうしの意見が剣戟のごとくぶつかり合う激しい衝突もなく、波風立たずになんとなく収まったような、つまらない選考会だった。

これは、たまたま傑出した作品が出なかったということなのか、それともこの銀華文学賞がマンネリ化してきて、賞そのものから生み出す力が鈍化してきているのか、懸念を抱かずにはいられなかった。ちなみに第三回も当選作は出ていない。そのときは応募総数は一五〇篇で優秀作が五篇出ていた。その次の第四回は逆に当選作が三篇出ている。樂觀的に見れば今回は三篇並ぶほどの豊作になる可能性もあるということだろうが、しかしもし後者が原因だとしたら、抜本的なことを考えなければならぬだろう。一つの節目を迎えているようにも思う。

冴場渉氏の「白鳥ダンスクラブ」はやはり技量は安定していて確かだ、癌という病の肉体を通して見る、未払い者調査の人生の苦渋の模様が、老人たちのダンスクラブの灯火によってひとときの救いと癒しを得る姿は、地味だが体の芯に染み降りてくるような味わい深いものがある。ただ、昨年度選作になっているので、連続の受賞に抵抗があったことは否めない。その意味でも、また深い趣きを尊重する河林賞の性格からしても、この賞にふさわしい作品と言えるだろう。氏の技量はだんだん冴えが出てきて、モチーフやテーマが的を射るようになってきている。その点でも賞場に値する。

優秀賞の三人はすでに何度も選考に登場して受賞もしている「馴染み」なので、その点でも新鮮さに欠け、作品自身も過去のもの以上に飛躍が見られるかという点、わずかに視点や材料が変わったという程度のものである。私個人

佳作

- 「ラッキー・シルバー」 服部幸雄
- 「ジャパニーズ・ドリーム」 李耶シヤンカール
- 「交歓」 相川柊子
- 「長距離運行」 野上 卓
- 「ヤギ仙人」 伊藤多津江
- 「さまよう手」 瀬口 至
- 「生と死の境にある村」 カレン
- 「雨の糸」 有森信二
- 「観音さまに・・・」 山崎文男
- 「さらされた場所」 瞳山 秋
- 「旅立ち」 黒田直隆
- 「山谷下や街残酷屋」 小笠原 新
- 「ことば」 丸山 史
- 「小百合と権蔵」 風前舎一氣
- 「リリス」 吉見 淳
- 「乳」 宮尾美明
- 「泥の街」 ならばたかし
- 「ガラスの壺」 波佐間義之
- 「世間さま」 タナカトモユキ

- 「不老虫」 大島龍彦
- 「沈園」 吉田宏子
- 「流される猿」 皆笹麻希江
- 「贈り物」 奥はじめ
- 「まぼろし」 岡野弘樹
- 「朗読」 荒井隆志
- 「天まで届け」 白石明子
- 「冥想海峡」 齊藤澄子
- 「ユ ヒヨジン」 武藤蓑子
- 「都会の夕景」 小林理樹
- 「念書」 中川一之
- 「蒼顔の自画像」 秋山よしひさ
- 「鏡の中の私」 吉田芽生
- 「泣ける」 小野友貴枝

歴史小説賞佳作

- 「雪の孔雀」 北条かおる
- 「人魚師赤目の米三」 碧居泰守
- 「清明」 ヒミ子

としては不満ではあったが、実績に対して積み重ねの功を認めた結果になった。

そうは言っても、最終選考までの得点はかなりのものだったので、その美点も挙げておきたい。

「夏の揺曳」(室町眞)は屈折した幼年期のこもった翳りが一つの色彩を得ている。ただ、その翳りが余計者として主人公の家に居候している伯母の暴露「どうだ、わかっただか、おまえら兄弟はみんな愛人の子なんだ」というところで、露骨に出てしまうのは、味消しで、こういうことは隠したまま含みで生きていくところに深まりが出てくる。母親が妻か愛人かなどということは居直ってしまったらどうということではなく、「だからなんだ」と胸を張って学業や仕事に打ち込んでいけば年とともに消えてしまう。問題はその子が背負う屈折で、その翳りが性格や中枢を作り、独特の何かを作っていくので、そちらのほうを描くべきだった。価値の比重の掛け方が見当違いをしている分弱くなった。

「赤い眼」(神通明美)は、それまで幸せそうに見えていた友人夫婦の亀裂を知らされ、離婚という岐路に立った六十歳の女性の立場を、赤裸々な自然の姿の中に感じさせられる内容だが、鹿の眼は、愛情の基盤を失った女性の根底が透視されるような鋭さがあつて、鮮烈である。そのシーンにはこわさがあつていいもの、もう一つその底が示されていない。掘り下げがないことが、着眼やシーンの簡單

な描写に終つてしまっている恨みが残る。「赤い眼」が自然の中から呼びかけるその声と意味とをもっと深く洞察して、こちらの現実の側に一つの連結としてしっかりと提示しないと、たんに着想だけに終つてしまう。その掘削の浅さが、ややもの足りなかった。

「父の理想郷」(来の宮あんず)は、モノローグによる吐露を文体として成立させている小説である。第五回優秀賞の「旅の人」でやはり濃密なモノローグによって追い払われていく一人の老婆の生を描いた作品に対する、老爺パージョンといった趣だが、執拗に独り語りで塗り重ねていく文章が、何かを追い求めて止まない人間のある執着のようなものと重なり合つてくるところが、一つの世界を浮かび上がらせてくる。執念や執着によって生きる、ある受け継ぎがそこに期せず生起する点は美点であろう。しかし父の理想郷が「自分を待っていた」と邂逅の意味で終らせる結末は惜しく、自分の老境への始まりを含めた普遍的な生の終焉とその意味への深まりまで運んでいない点が不足感を抱かせた。この文体は珍重すべきだが、もっと俗なものなかにうねり沈潜していくことによって逆に何かが見えてくる逆説的な構造を備えている点を自覚すべきだろう。執着や執念を徹底的に表すことによって浄化されてくる方向を見失わなければ、さらにおもしろい作品が書けそうではある。

今回歴史小説の領域は、偶然に幕末から明治にかけてのものが揃い、一つの繋がりを示して希有な作品群となった。飛葉哲朗氏の「弧月」は、幕末の大塩平八郎の時代を背景に秘剣の成就を見届ける表のストーリーを追いながら、陰謀や黒幕のひろがりや想をさせる雰囲気がいい。奥義を描く截然とした文章は切れ味を見せている。これがもつと歴史と直結していく匂いを感じさせれば一段と重みを得ただろう。せっかく大塩平八郎の乱を出しながら、結末が薄い象徴としてしか時代に響いていけないのが惜しまれる。ただ、全体に匂う緊迫感は今回の歴史小説中随一で、文章に結晶感が漲っていた。

吉田満春氏の「榎本武揚と手袋」は、箱館戦争を手袋というおもしろい視点から描いていて、北方の戦争の一面面が如実にわかり、またその合理性のゆえに榎本が敵側でありながら明治政府に重用された経緯も伝わってくる。好短編である。日本の手袋の始まりという歴史側面も含んでいて、読みやすさ、娯楽性にも富んでいる。歴史をこういう身近な面から掘り起こす手腕は一つの才能で、これからも大事にしてほしい。

幕末を舞台にした歴史小説はこのあと「国境」(白井康)、「惣一郎戊辰戦争従軍記」(大森耀平)、「サムライ養鶏」(藤澤茂弘)と奨励賞の一群が続き、さらに三次予選作品のなかにもいくつかあったように記憶している。これらを

並べてみるだけで、幕末から明治への流れがリアリティをもってよみがえる。ちかいうちに特集してみたい。「国境」は北方領土の問題を幕末の取り決めがどのようにされたか鮮明に描いて現代に響いてきているし、「惣一郎戊辰戦争従軍記」は、奥羽地方の戊辰戦争を絵巻物のように表して

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

いて、その経緯を納得させられる。「サムライ養鶏」は明治の改革によって食えなくなった武士がどのように日本の養鶏業に力を注いで、立ち上げていったか、人間の動きとしてよく理解できる。学びながら楽しませてもらった。

奨励賞のなかで書き記したい作品も少なくない。

「瘧」(土岐田耕)は、若い頃の恋愛を回想した一篇だが、七九歳でこれだけの濃密な男女関係を描けるのは貴重で、やや一方的な男性本意の書きぶりではあるものの、波打つ官能の炎は生々しく伝わってくる。きわどい領域に迫りつつ一線で踏みとどまって、文学の姿として立ち上がらせている。サブタイトルにいろいろ付けすぎて、損をする結果になったが、その心意気を買う。ぜひ七色の虹を完成させてほしい。

「成るがままに」(星野透)は、若い後妻と息子の不倫を素材にしており、星野氏にしては思い切った題材で、その緊張感はいくらも作品以上に強く引き込まれるが、この大きな材料では、五〇枚はやや無理かもしれない。子供を妊娠している自分に気づくが、どちらの子供かわからない。息子の種とわかるが、その息子は事故死する。あとから息子が自殺したと知り、育てていこうと決意するところで終るが、最後が安易に流れて上ずってしまったのは、長さが足りないことによる。星野氏の濃密で彫りの深い文体は応募作品中でも一、二の醗酹感を伴い、この文章を愛するが、

リカでも、ヨーロッパでも、アジアでも、同じ問題を抱えて働いている日本人がたくさんいるからである。

「蝶舞う村へ」(遠藤秀紀)はこれも外国を舞台とする作品だが、東南アジアの内陸国ラオスについて書かれた部分は借り物ではなく、蝶についての探求やのめり込みも陶酔的な美しさを伴って一つの世界を立ち上げている。問題は留守中の家族の破綻が安直に作られてしまっていて、せっかくの蝶へのロマンを壊してしまっている点である。サラ金の取り立て以後はやり過ぎで、娘が宗教に走ってラオスで再会することになっては、作爲が過多で興醒めになってしまう。蝶をとるか家族をとるかという選択をもっと前の段階で追い詰めていくことによって、蝶への止揚も可能ではなく、後半を根本的に作り直すべきである。「太鼓供養」(河野つとむ)は、太鼓持ちという座敷職業の現代における廃れとその悲哀を巧妙な文体で書き切っていて、一花咲いている。多かれ少なかれ座敷芸はこのような衰勢を辿るのであるが、それを切り捨てるのではなく、暖かく汲み取るうとする肌触りが諧謔的なリズムと相まって一つの文体となって流れている。

歴史小説奨励賞で、もう一つ触れておきたいのは「越南の仲麻呂」(佐々木忠弘)である。仲麻呂が越南(ベトナム)の安南都護符の朝衡として赴任し、当時のカンボジア・チャンパの侵略を退けてさらに出世していく過程を描

父親の姿がもう一つ見えないことに加えての最後の処理が薄くなった。長くなってもいいので、手を加えてもらいたい。「封印」(井上理博)は問題作である。死刑執行人の業務を描いて生々しい。執行場面のリアリティはかなり濃く、臨場感是十分である。しかし主人公がこの業務に悩む部分やこの苦悩から辞職するに至ってはどこからか借りて来たような脆弱な思考パターンが突き出して来て、破綻が感じられる。現場に携わる多くの人はこの苦悩を抱えて仕事を続けているはずで、これを簡単に否定してしまうような論理は、門外漢の押しつけのような気もする。題材に凄みがあるだけに、もっと内部に踏み込んだ視点で押し切ってほしかった。

「悪意」(成瀬健太郎)もこれまでにない素材で問題を孕んでいる。外国社会の外国人スタッフのなかで上に立つ者として働く危うさを描いたもので、言葉や社会習慣の違いが壁になって、その陰で眼に見えない集合意志が働く怖さをよく描き出している。ただ、動機が恋愛だからこの程度の被害と恐怖で済むが、もっと大きい事件や問題にひろがる可能性を持っている。この構造を拡大していけば、ベトナム戦争時代のベトナムの地で戦う米兵の立場にも当てはまる。この心理構造をよく自覚した上で、恋愛とは別な適切な素材を当てはめていけば、もっとインパクトの強い普遍的な作品になっていくだろう。なぜなら、現在アメ

いて、興味深かった。唐時代のインドシナの情勢もよくわかったし、玄宗皇帝期の混乱の状況も間近で見る臨場感がある。唐の歴史にこのように日本人が関わったことをあらためて知らせた功績は大きい。チャンパの時代の象を用いた戦闘もよく書けていて、映画にもなりそうなスペクタクル性があった。記憶に残る作品だった。

佳作になってしまったが、「鏡の中の私」(吉田芽生)の、過去の恋人との幻想の恋愛に染まる大胆な発想は斬新で、注目した。前半のまま押し切ってしまうは優秀賞レベルだったが、最後が平凡な着地をしてしまったのが惜しまれる。着想はおもしろいものを持っているので、人に読んでもらってフィクションの技術を備えていけば一つの世界を持ち得る才能だと思う。

総じて、渾身の力を込めて書いたような作品が乏しい。人の胸を射抜く大きなエネルギーや、磨きに磨いたような結晶感が薄くなってきている。銀華賞の銀のきらめきももっと鋭く、強く、深いものであるはずだ。人生の終盤に一生や命を振り返る行為のなかには、もっと強烈な人生の秘密に迫る発見や考えが潜んでいそうである。もっと凶暴で、もっと重大でいい。人生の意味や価値を覆すような新たな試みをフィクションという手段を使って大胆に展開してほしい。来期は銀華文学賞も一〇年になる。思い切った作品が登場してくることを期待している。

受賞作のたたずまい

小沢美智恵



今回は当選作なしという結果になった。

候補作四七編を選考委員全員で読んだのだが、残念ながら受賞作にふさわしい作品がないということで見

見が一致した。みなある水準には達しているし、魅力的なところも随所にあるのだが、「この作品！」と推せるだけのたたずまいがなかった。優秀賞、奨励賞、佳作の区別はつけたが、それも僅差である。

優秀賞の神通明美「赤い眼」は、離婚はせずに熟年別居している女友だちの話である。語り手の瑞枝は妹の入院手術の付き添いのため友人・博子の住むマンションに泊めてもらうことになり、その生活ぶりや夫婦関係を知ることになる。タイトルの「赤い眼」は、友人が夜の山奥で見た鹿の眼のことで、彼女が「周りの闇が不本意に生きてきたこれまでの暮らしに思え、赤い眼がこれから進む方向の道しるべに見えてきたの。(略)それで心が決まったの」と語るように、別居に踏み切る切っ掛けになったシンボルで

ある。博子はそれを瑞枝に見せたいと夜の山道に車を走らせ、ついに二人はその「魂まで吸われそうな奥深い光」を見る。だが、翌朝帰途につく瑞枝は、「博子は今夜もあの山道を走っていくのだろうか。(略)憑かれたように赤い眼を探すのだろうか。その眼から更に前に進む力を得ようとして」と友人の心境に思いを馳せるだけで、自分自身は少しも変わっていない。登場人物の心理が変化することが、小説内での正確な意味での「時間」であるなら、この小説には時間が流れていないことになる。妹の子宮筋腫の手術や、友人の別居の決心という「事件」に出会うことで、主人公・瑞枝の心理が変化していたら、この小説はもっと強い顔を持って立ちあがってきたのではないか。

同じく優秀賞の来の宮あんず「父の理想郷」は、父に棄てられた娘が、ふとしたことから父が「理想郷」にいたいことを知り、探しにゆく話である。作者は、幼いころの父との思い出や父と母の人となりのエピソードを、ほとんど改行のない書き方で積み上げることで、次第に読者を独特な世界に引き込んでいく。が、せっかくの豊かな作品世界は、インターネットで検索した一碧湖近くの「理想郷」という土地を実際に歩く段にさしかかると、途端に退屈になり失速してくる。同じような記述が延々と続くからである。そして、幼いころ父に聞いた言葉から辿り着いた家が幸運にも父が住んでいた家の隣家で、その家の夫婦が親切

にも、見ず知らずの「わたし」に夕食を供してくれ、たまたま壁に貼ってあった父との思い出の鯛の絵から父の最期がわかるという展開にいたると、あまりの都合のよさにリアリティが希薄になる。物語は、この後「結末」に向かうのだが、妻子を捨てて好きな女性と駆け落ちした父が隣家の主人に語った言葉、「妻子のいる家がどれほど心地よい場所であったかも見えずに」をキーワードに、「もし父に理想郷があったとすれば、(略)働きの妻とその娘の住んでいる城、そこが父の理想郷ではなかったか」という常識的な解釈に回収されるのである。作者は、前もって用意した単一の意味の「解決」に向けて、物語を紡いでいったのではないか。それが作品の自然な流れをさまたげ、「解決」に都合のいいストーリー展開に結びつけてしまった原因であり、テキストが最初に持っていた豊かさを振り落とす結果を導き出したのではないか。

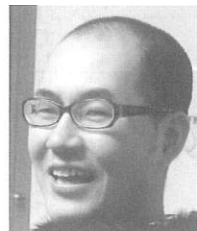
佳作に終わったが、岡野弘樹「まぼろし」は、不思議な臨場感をもった作品である。第二次世界大戦で戦死したと思われる父が、ぼろきれのように殴られる場面。火事の中で脳溢血を起こし倒れている父を、母子が必死に起そうとする場面。そんな場面がスローモーション画像のように詳細に描かれ、読者の目に焼きつく魅力がある。父は戦場で敵兵を助けようとして助けられず、その際に見た上官の残虐

さと相まってトラウマになっている。この作品は、そんな細々としたエピソードを並べて、戦争の無意味さを表現しているともいえる。だが、そこには「今」がない。なぜ二〇一二年の今、戦後すぐの情景しか出てこない作品が書かれなければならないかったのか、その必然性が見えてこない。まるで作者の時間は半世紀前で止まってしまったかのようにある。作品にはその時代に要請されている何かがある。その部分こそが読者や作品世界に引き込み、時代が変わっても簡単には古びたり色褪せたりしないで生き続けるのではないだろうか。この「今」がない作品は多く、それも受賞作のたたずまいに欠ける原因の一つであるように思われた。

その他、紙数が尽きたので詳細は省くが、河野つとむ「太鼓供養」丸山史「ことば」飛葉哲朗「黒い淵」吉田満春「榎本武揚と手袋」、遠藤秀紀「蝶舞う村へ」が完成度の高さで印象に残った。いずれもいい作品なのだが、受賞作に推すにはほんの一滴何かが足りないと感じさせるのである。それが何であるかは、どんな書き手も書きながら模索していかなければならないのかもしれない。けれども、作品世界をとことん突きつめたとき、それは行幸のように降りてくるもののようにも思うのだ。

歴史・時代小説の隆盛と 『おもしろポルノ賞』設立の必要性

都築隆広



今はどんなことをしていらいっしょるのですか？ と初対面の人に聞かれて、「朝から晩まで、時代小説を読んでいます」と答えていたぐらい、今年も歴史・時代小説が豊作でした。こうした作品の応募が殺到するとい

うのは、年配の人達が佐伯泰英に代表される時代小説ばかり読んでいるということで、文学側の人間としては素直に喜べなかつたりもします。それでも、平均技術の高さには舌を巻きました。なかでも歴史小説優秀賞の「弧月」には、かつての歴史小説部門はあり得ないぐらいの選考委員の得票がありました。私も面白く読みましたが、時代小説読者から見たら、わりと一般的な時代小説なのではないかという懸念もあり、そのあたりの判断は読者に委ねるとしましょう。

続いて、歴史小説優秀賞の「榎本武揚と手袋」と佳作の「人魚師赤目の米三」の二作も私は推しました。その着眼点の

奴といった感じで、それを普通のことのように淡々と描いてゆく文体に好感が持てます。ラストシーンにも余韻があって、銀華文学賞らしい作品だと思えました。

個人的なイチオシは「父の理想郷」でして、「大黒屋のスガキさん、理想郷にいるそうよ」という不可思議な語り出しが、ハリイ・ケルメマンの「九マイルは遠すぎる」やクリステイの「なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか？」といった、謎めいた一言を探ると、とんでもない事件があきらかになる系ミステリーを連想させ、マニアにはたまらない作品でした。失踪した父親がどこか遠くで幸福に暮らしているのではないかとというビジョンは、辻原登のスパイ小説（実際にスパイが出てくるわけではなく、そういうジャンル）、「ジャスマン」とも共通しますが、「父の理想郷」には独自の物語と説得力があって、魅了されました。

奨励賞の「太鼓供養」も辻原登の「遊動亭円木」をイメージさせる、奥深い芸の世界でした。小沢選考委員が「時代小説なのかと思った」とこぼしておられました。現代劇を大昔のことにように読ませてしまうのも作者の手腕といたるところでしょう。

同じく奨励賞、「蝶舞う村へ」は主人公が堂々と会社の金を使い込んで、ラオスへ蝶を見に行くという冒頭が素晴らしい。ただ、後半はドラマチックに描こうとするあまり、

秀逸さから支持を集めた「手袋」はともかく、人魚のミイラを作るといふ筋の「人魚師」の方は、「世のオカルトファン垂涎」と絶賛する私とは裏腹に、訝しがる審査員意見が多数を占めました。人魚のミイラはこれほどまでに風当たりが強いものなのかと、その温度差たるや甚だしかったです。

ところで、銀華文学賞全体としましては、ずば抜けた作品があらわれなかったもので、今年も当選作なしでした。公募の賞で当選作が出ないときは、主催者側がお金をケチツているか、選考委員の性格が極端に悪いかのどちらかなのですが、今年の銀華文学賞にしましては、本当に飛びぬけた作品がなかったのだと、我々、審査員一同が保証いたしましょう。

そのかわり、「夏の揺曳」「赤い眼」「父の理想郷」の良作がトリプル優秀賞でした。

まずは少年視点の物語ながら、一家の父親と伯母のダメ人間ぶりが凄まじかった「夏の揺曳」。ラストのどんどん返しにはかなりびっくりしたのですが、他の選考委員の方々はさほど驚かなかったそうです。確かに世間ではよくある話なのですが、そこに辿り着くまでの筋の運び方が巧みでした。次に、「赤い眼」。舞台の石和温泉は、私も毎年忘年会で行ってバカ騒ぎをしているのでイメージし易かったです。この小説に登場する女はリアリティーのある変な

フィクションが過剰になっていました。作者は比較解剖学の分野では名の知れた研究者ですが、無理に創作しようとせず、学生にやさしく語りかけるようなタッチで書いて欲しかったです。特に文学というジャンルでは、「自分が体験したこと」や「体験する可能性（リアリズム）」があること」の二本柱をどこかしら、意識下に置く必要があります。

最後に問題作「痣」——かぎりなく深く透明な赤い俊子。サブタイトルの「かぎりなく透明な」の部分に赤ペンで傍線を引いて、「ブルー」と書き加えたのは私だけではないはず。内容はせつなさのあるポルノで、昨年に続いて、生涯で出会った女を書いてゆくという、井上靖の「あすなろ物語」を連想させる連作です。私もこれまでに振られた女の名前を横並びにしてゆくだけで「源氏物語」五十四帖が書いてしまいそうですが、この小説にしましては主に濡れ場での主人公とヒロインの台詞があられもないといましか、あけすけな印象を持ちました。ですが、選考委員の方々を喜ばせたり怒らせたりした話題作でもあり、確かに面白いといえば面白く、文学作品として評価すべきか、スターウォーズみたいにどんどん続いてゆくのかなあと、とにかく圧倒されました。型に嵌らない作品を型に嵌める、おもしろポルノ賞の設立を本気で求めたいところです。

難しい選考となった

大高雅博



今回は下読みの段階から、質の高い作品が多く、中々難しい選考となった。

佳作となったが、二つの作品が気になった。

岡野弘樹「まぼろし」は、最近では珍しく選考員の評価が真二つに分かれる作品であった。父親が戦地から帰ってくるのだが、戦争の後遺症で、存在感がなく、また、その行動も突飛で、現実的ではない。論理的に考えると小説が破綻していると考えるか、それもこれも含めて「まぼろし」とみるかで評価が違う。小説の曖昧な部分、例えば、帰ってきた父が、妻と息子にしか見えないと思わせる部分もある。最後まで読むと、そうではないようだが、それも含めて、戦争によって、まぼろしのようになってしまった父というの、その存在が反戦的である。筋としては、妻と子にしか見えないまぼろしの父がいて、最後に本物の父が帰ってくるが、結局存在感がなく、まぼろしのような存在だったというのが、面白かったかもしれない。

それが強すぎた面がある。今回はそれが少なく、すんなり読めた。

時代物では優秀作吉田満春「榎本武揚と手袋」が面白かった。戦いでの手袋の重要性を縦軸に、榎本武揚と関係させるのは中々の着想だ。ただ、後半部分で、もう少し絞り込んだ方がよかったかも知れない。冗長的になったのは残念。

白井康「国境」は北方領土問題を扱った作品で、興味深く読んだが、枚数が少なすぎるようだ。もう少し、長くした方がいようだ。

藤澤茂弘「サムライ養鶏」は、結局、名古屋コーチンを生み出すという話でこれも興味深く読んだ。

その他にも、相川柊子「交歓」は夫を飼育していく話で着想が面白い。丸山史「ことば」は昔の女友達との再会であるが、大阪の風景が旨く描かれていると思われる。

さて、今回は、当選作が生まれなかった。

最初にも書いたように全体のレベルが上がっている。前述のように中々の力作が集まっている。そのために逆にその中を突き抜けるようなエネルギーが作品に必要とされている。

恐らく、書くべきものはきつと、目の前にある。頑張ってください。

瞳山秋「さらされた場所」は、翻訳小説のような趣がある作品である。かなり上手で、完成されていると思われる。ただ、全く日本人の出ない作品でこの小説を書く意味があるかといわれるとそうとも言える。それに、これは、かなりの資料を使ってあり、それが、この小説にどの程度反映されているのか分からない。もう一作この人の作品を読みたい。そして、このレベルの作品が生まれれば積極的に評価せざるをえないのではないかと考える。

優秀作の室町眞「夏の揺曳」は、何作か読んだことがある彼の作品のなかでは、一番優れているかもしれない。少年期の父との関係を軸にした自伝的な小説なのだが、ただ、この人は独特の切り口の前衛的な作風があり、この作品が評価されるのは室町さんにとっては少し不本意かもしれない。次作は室町さんらしい作品を期待する。

優秀作、神通明美「赤い眼」は、前作までのものとは全く違う印象があり、興味深い。赤い眼は鹿の眼のことであるが、その不気味さは、女友達からくるもので、なぜか迫力がある作品に仕上がっている。神通さんには不本意かもしれないが、僕が読んだなかではこれが一番良いかも知れない。

優秀作、来の宮あみ「父の理想郷」も、今までの作品の中では、一番読みやすかった。この人の作品には小説的には必要な歪みのような物を感じられるのだが、今までは

ひとり選評

八覚正大



この賞も第九回目を迎えることになった。今回は、なんと、どうしても抜けられない別の世界の「仕事」があり、選考会に出席出来なかった！結果を聞くと、受賞作なしとのこと……そんなものか、という気持ちでこれを書いていく。幾分孤立感はある意味で私が推す作品の「ありのまま」を書くことになった。それが良いのか悪いのか、本当は当たっているのか、いや外れているのか……読者にお任せする。任せられても困るかもしれない。

読んだ順番に印象に残った作品を上げて行こう。「再会のゆくえ」お互いに自閉症児をもってしまった、かつての男と女が保育園で再会する。ラストが面白く文学にはなっている。

「長距離運行」運送業界の話。よく描かれていて小説にもなっているが、やはり事件のような山がほしい。

「通達アルファ」夫と子どもがいる女性社員の不倫の気

持ち、でもそのくらい遊びがなければ、やってられないという感覚は分かる。PCメールの展開がもつと欲しかった。「畜生と家主貞良」少年の目から見た、おじさんおばさんの世界。ストーリーがというより、べつたりと世界を見ていく文体のおもしろさがある。

「サムライ養鶏場」名古屋コーチンのルーツを描いた、なかなか読める作品。侍の中からそのプライド枠を外せる柔軟者が現れ、時代に適応して行った……。知識のみならず、ある種、勇気の湧く面白い作品である。

「弧月」臨場感あふれる読ませる作品。プロの文体と言っている。忍びと侍の対決なのだが、まず剣術の試合の描写の巧みさ！しかし実は本当に勝負を制する支配力とは、奸智こそであり、そこには男と女の問題もあるだろう……それを匂わせつつ（しかし見事な隠し技？）政治のしたたかさを捻り入れるスタンスも見事。時代物としても、また銀華文学賞としても私は推す。

「悪意」アメリカに赴任した若い日本男性の日常。といってもその中に立ち現われる非日常感覚。それがなかなかうまく描けている。そして異文化と触れ合いながらその世界と対峙しつつ、どこか心を病んで行く闘いへの痛ましさど踏みとどまりの感覚を感じる。なかなかの秀作である。少なくとも優秀賞には推したい。

「五十年目の乳房」母と子の長い歴史が見事に描かれて

「九月の夢」夫を亡くした女性が、子離れもしなくてはならなくなる。ラストで新しい道が開けて行く所は良い。

「念書」人間の情と現実が描かれている。男と女も。ただカンボジアというシチュエーションは必要だったか。

「藤の家」妻を亡くした画家。前半の男と女の臨場感はあるが、後半の流れがどこか唐突。

「蒼顔の自画像」リストラを食いガードマンをやっている男の話。それはよく描けている。

「惹」性愛のエロスを、ここまでうまく描かれては臨場感、扇情感を禁じえない。言葉の使い方とその世界を知りつくしている感がある。快感のなんたるかを言葉に込める力……と言えよう。ただ、タイトル副題が、限りなく透明に近いブルーの反対か……なにか、もう少し小説としての志のようなものも見たかった。でも優秀賞には推したい。

「太鼓供養」太鼓叩きの世界、流暢な流れ……描き方は評価するが、それ以上のインパクトは感じなかった。

「闇」死者の側から見た葬式の話。よく描けてはいるが、死者が饒舌過ぎた。

河林満賞「白鳥ダンス倶楽部」について。

冨場さんの作品は、探偵業の、しかし人生に疲れた男が自らの回想的な過去を再び垣間見るようなところがあつた。しかもどうにもできない状況への、男の「渴き」のよくな情が見事に出来たと思う。今回の作品は、さらに主

いる。息子の視点から母親を見続けてきた人生。母親の乳がん、その手術……。実に文が良い。私は銀華文学賞に推したかった。しかし、結果を聞くと、えっ、何にも入っていない？作者の人生が、長い時間の経過をじつと見つけてきたまなざしが、見事に描かれているではないか！文学というものは、書き方も自由だし、読まれ方も自由だ。しかし、言葉というものが人間の生み出した最高の発明品であり自らに与えた贈り物とするなら、このような作品こそ「書くに値する命の重み」を感じさせるのだが……。

「ブラキセラピーな奴」前立腺ガンの手術の話。克明に描いてあり。それだけで評価に値しよう。文学を超えて病理とそれに接した心の描写を読む価値がある。

「まぼろし」これも凄いい作品だ。戦争から生還した父親が、心の奥深い傷をいやせず、苦しみ不可解な行動を起こして行く……それを見続ける主人公。戦争？少し古いという読者もあるかもしれない。しかしここには、暴力の持つ人間の性・業が描かれている。鮮烈で哀しい作品である。優秀賞には推したい。

「もういいかい」死に臨んだ男の内面。いろいろよく描けているが……。タイトルは以前にどこかで聞いたような感覚。

「赤い目」老女二人の対話。今一つかなと思いつつ、ラストで鹿が出てくるあたりから、良くなって読ませた。

人公の男が病んでいる。転移性のガンの術後、しかし生活のために多重債務者の家へ行くという出だした。そこで出会うのは七十歳を過ぎたような疲れた母親だ。それでも別れ際怒りの情をぶつけられる……。帰路、入った喫茶店では不思議な光景を目撃する。やはり七十代の男女が異様に着飾りダンスを始めたのだ……。最後にはそれに巻き込まれ、相手をした女性の「彼氏」から恨まれもする……。しかしそんな残り火を燃やすような老人たちの生き方に、自らもどこか生きる元気をもらい直す——という小説である。高齢化社会を目前にした日本の、そしてまた作者自ら身体を病みながらそこに入っていく、その作家としての「まなざし」を感じる秀作と思う。さらに、絞り出すように「男」の末路に光を投げ、書きつづけてほしい作家である。

……やはり、選考会に出て、諤諤喧々……とやらないと、高揚感が湧かない。人間とは個としての性を深くもつとも、仲間集団としての繋がりの中で、自己を把握できる存在でもある。言葉というのは、個の内面から湧き出る様々な層と共に、むしろ人間の「あ・い・だ」に生まれ、繋ぐ作用をもつものだという事実に、いまさらながら気付かせられる。選評においてそうなのだから、書くことに描いておや。書き手はすべからず、仲間を求め自己を開き、孤立しないことを強くお勧めする。

読まれることの怖さ

小浜清志



小説を読まれることの怖さを識ったのは今から二十数年前、やっと春のさざしが見えだした三月の初めだった。

新宿中央公園に面したマンションの十一階が私の師匠である中上健次の事務所だった。私がその事務所の電話番号として通いだしたのはその年の初めからであったが、当然定職もあつたし夕方の三時間だけという取り決めだった。

職場近くの四谷三丁目の地下鉄に乗り新宿で下車し西口から中央公園へ向かう地下道を歩いて事務所へ向かう。

マンション入口の郵便受けから郵便物を取りだしてエレベーターへ向かう頃から私は緊張して身がまえる。電話番号という名目ではあつたが、時折中上健次が顔をだし、私の原稿の進捗状況や作品の構想などを、まったく脈絡なく尋ねることがあつた。それが単なる質問であるわけではなく、時には叱責と怒号がとびちる。

その日は鍵が開いていた。中上健次が先に来ているとわ

だ煙を天井へ吐きだすといつもの野太い声で咳いた。

「こいつ酒呑まんだろう」

「はい、そうです」

とつさに答えはしたものの私は予想もしていなかった言葉にうろたえていた。わずか十数行しか読んでないはずなのに、見も知らぬ友人が酒を口にしないことが何故わかるのか。

驚愕する私を見て先生が笑う。

「お前、そんなことで驚くなよ。こんなの当たり前のことだろう」

「なぜ判ったのですか？」

私は思わず質問してしまったが、すぐに後悔した。しかし、手遅れだった。無然とした表情に変わった先生は無言で立ちあがった。思いつきの質問を先生は最も嫌った。窓際のバッグから紙袋を取りだすと、私の前に叩きつけるように置いた。

「ここに五つの作品がある。明日一杯時間をやるから、これを全部読んでみろ」

私はおそるおそる紙袋の中身を取りだした。それは来月に選考される新人賞の作品だった。

「いいか、最初はまったく何も考えずに読む。その次にこれは名作だと決めつけて読む。そして最後に駄作だと思つて読むんだ」

かつた瞬間から、私の鼓動は変調をきたす。私は届いたばかりの文芸誌や新刊書などをかかえて部屋に入った。中上健次はいつものように絨毯に仰向けになりハイライトを吸っていた。

目を閉じていけば声はかけないが、目を閉じたまま天井を見ている。

「今月の文芸誌が届いていますか？」

私が小さく声をかけると空いている手で床を叩く。その場所へ「文学界」「新潮」「群像」「すばる」「海燕」をつみあげた。煙草を灰皿へ置いたまま、★力づくし★に封筒を破り雑誌をパラパラとめくっていく。私は煙草が灰皿から落ちないように見張っていた。

事務机に向かっていた私は寝転がっている先生を見下す格好になっていることが気になっていた。床の灰皿から落ちた煙草をひろい事務機の灰皿で消す。ずっと無言が続いていた。「海燕」を広げたとき、私の友人の名が見えた。

「先生、××は私の友だちです」

「××か？」

「はい」

私の返事を待たずに頁をめくっていたが、数分間目を通したあと、上半身をおこすと灰皿に目をやった。煙草がないのを悟ると新しい煙草を取りだした。私はすかさず忠実な執事のようにライターの火を差し出す。大きく吸いこん

私は思わぬ展開に狼狽していた。先生は財布から一万円を取りだすと紙袋の上に置いた。

「いいか、これは食費だ。この部屋から一步も出ずに読むんだ。じゃ、明日」

先生は一方的に告げると部屋を出て行った。残された私はしばらく何もできずに煙草をたて続けに吸った。何がどうであれ師匠の言いつけにさからうことはできない。とりあえず職場に電話をして明日は休みますと伝えた。最終選考に残った作品はずつしりと重かった。先生が何を教えるようとしているのかが分かってくると感謝の気持がわいてきた。そして読んだ。言われた通り読みつづけた。いつ夜があけたのかも知らなかった。しかし読み進めていると作者の風貌や生活習慣などが浮かんできたことは自分でも驚きだった。そして読むということが少しわかった気がした。翌日現われた先生は憔悴しきつた私を見て満足そうな笑みを見せた。

「お前ならどれを当選作にする？」

「私は当選作なしです」

「そうか、強いてあげるならどれが一番いい？」

私は読みつづけて得た感想を問われるままに答えた。一時間ほどの問答が終りかけたとき先生が突然ほこ先を変えた。

「この作者の中で離婚した者はいるか？」

私は一瞬答えにつまったが、おぼろげに浮かんだ作者の名を挙げた。何故そう思う？ 離婚の理由は？ 質問は矢つぎ早にくり出された。勿論、正解はどこにもないが、推測の深さを追及されていた。結局、そのままゴールデン街へ場所を移し明け方まで議論はつづいた。しかしあの日之境に私の読む姿勢が変わったのは事実である。

さて、長々と回顧談をつづったが、今回の選考に当って再読した作品は「榎本武揚と手袋」「サムライ養鶏」「蝶舞う村へ」であった。

書こうとする作品におぼれたり、または冷淡になりすぎて形を崩してしまった作品が多かったが、作者の作品に向かう姿勢に大いに心惹かれた。



2012.11.03

選考会風景

文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・

イラスト・漫画賞

授賞式&祝賀会・新年懇親会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わしましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十五年一月二十六日(土)

授賞式午後二時/祝賀会・新年懇親会五時半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール

東京都大田区下丸子三・一・三

TEL03・3750・1611

※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七里見・五十嵐まで

または090-8171-9771まで

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ
千葉大文学科卒
93「妹たち」で川又新人賞受賞
95 評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作
06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞
日本ペンクラブ会員

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大文学科卒
80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

都築隆広

つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ 東海大文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(「文芸思潮」)「ハンコの町の鰻がいる家」(「三田文学」)他
月刊「望星」書評員

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
教師・精神対話士
92「十二階」で新潮新人賞受賞
小説「零度の遊び」「イエロークラスター」「父のフレーム」「カウンター」ルポ『夜光の時計』

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流謫の鳥」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』(インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』他の作品に「ノンチャン、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」などがある

作家集団「塊」メンバー

夏の揺曳

歩き疲れてなれば意識を失いかけていた私は、不意に、焦けて黄色くなった父の指先から、強く発散してくるあの煙草の香りを嗅いだような気がして、思わず立ちどまった。考えてみれば炎天下、まだほんの子供にすぎなかった私は、食事もとらず、ひたすら歩きつづけていたのだった。ようやく何かから解き放たれたように我に返ったとき、実に十数キロもの長い道のりを歩き終え、とある寂しげな温泉町に辿りついていた。

信越地方にある高原の町とはいえ、暑く照りつける夏の光の中を、どうしてあてもなくさまよっていたのか、もう五十年以上も昔の話になるから、はっきりとした記憶は

の感覚器官は現実世界のどんな視覚にも聴覚にも臭覚にも、しばらくはまるで反応を示さない、ただの愚鈍な肉の欠片に変質している。

心理学を勉強している者は、十分に満たされていない欲求が私をそうさせていると解釈するかもしれないし、わずかなところで現実世界との関係性を欠落させてしまう私に、少年期の遺留物を見出すかもしれない。事実私は夢の中の出来事のほうがはるかに自分にびつたりくるという妙な気持ちにさせられることをしばしば体験している。

*

生命保険会社の支店長をしていた父の転勤に随行し、全国をほぼ二年おきに嫌々ながら渡り歩いた私が、はじめて小学校に上がったのは長野県の松本市だった。『烏城』と呼ばれる、五層の天守閣の美しく黒い外観を持った松本城を、私はしばしば魅入られたように眺めていた。城郭を見てみると、たった一枚の転勤辞令が父に手渡されるだけで、たちまち友人たちと別離しなければならなくなってしまいうらの宿命を、しばしの間だけが確実に忘れられた。転校生である私にとって、明日という日は今日の確たる継続ではなく、また現在の定めもそのまま未来の運命そのものというわけには決していかなかった。

当時私を魅了してやまなかった建造物がもうひとつだけ

室町 眞

残っていない。ただその日の数日前、父に風呂場で咎められたことが、微妙に私の心理に影響していた。

成人してからのちも、ときどき白昼に、車や人で混雑する街の中をまるで眠りに落ちたかのように、無意識に歩き抜けている自分に気づき恐怖することがあるから、あるいはこういう心的状態は私の資質かもしれない。実はあるひとつの意識が私自身を支配している場合に限って、何気なくすれ違った他人の顔や、書店に並んでいる本の背文字や、交互に明滅している踏切の警報機や、あるいは突然浮かび上がった記憶といったものが、いつの間にか私を空想の世界に引き摺りこんでいるのだ。もちろんそのときの私

ある。私の同級生で、両親が砂糖問屋を営んでいた岸本君の家の敷地内に、ずらりと立ち並ぶ「蔵」だった。蔵の中には茶色い砂糖袋が何か得体の知れない生き物の巣のようにぎっしりと積み上げられ、しかも常に暗くひんやりとしていた。岸本君に案内されて蔵の中に入るたびに、たちまち背後からじつとりと湿った闇の舌が首筋に絡みつき、私は恐ろしさで今にも泣き出しそうになった。それでも懲りることなく「一緒にお蔵に入ろうよ」と、しょっちゅう岸本君を誘っていた。一見矛盾した行動のようだが、そういう暗鬱で湿潤な「旧家」の構造は、子供心にも怪しい誘惑をともなつて私をたえず脅かし、また逆に強い好奇心をかき立てさせたのだった。そのころ、岸本君は父親の不倫騒動で深く傷ついていた。私は私で転勤の連続や、ややこしい家族構成に、いささかうんざりしていた。私たちは二人だけで、年中、蔵に籠っては、お互いを慰めあった。私は岸本君にたぶん自分と同じ匂いを嗅ぎ取っていたのだから。

城の入り口の掘割をささんだほぼ真向かいに建っていた私の家は、こうした旧家とはまるで対照的なコンクリート造りの二階家だった。その建物は一階が父の支店で、二階は私たち家族の住宅となっていた。でも実際には社員が私邸部分に頻繁に上がってきて、茶を淹れたり夕食を食べたり酒盛りをしたり、自由気ままに往来していた。当然なが

ら、人が立ち入る機会が少ない蔵とは違って、人の話し声や仕事のがさつな雰囲気、たえず静けさを喪失していた。この家に私はなじめなかつたから、あれこれ理由をつけては外に出かけた。

私の家族は父と母と私と年子の妹と、父の七つ違いの実姉である伯母との五人暮らしだった。そのころすでに四十代の後半に入っていた父・五郎は膚が透き通つたように白く、明治生まれとしては珍しい背高で、多分に「瘦せぎす」ではあるがエキゾチックな顔立ちをしていた。鬘甲縁（ペグ・エッジ）の丸い眼鏡をかけ、頭頂部は老人みためにすっきり禿げ上がつてもいた。そして欧米風の贅沢な食事を好み、困つたことに五十本入りのシヨート・ピースの缶をたつた一日で空にしてしまうほどのヘビースモーカーでもあった。そのせいで我が家の居間は煙製機の内部のようにたえず灰色の煙が充満していたが、私は父が吸うピースの匂いが大好きだった。それは高貴な花の香りを思わせた。一方、母・葉子はまだ二十六歳の若さで、しかも松竹映画の女優さんのように美しい人だった。そのように私の父母は、私にとって、まるで祖父と姉であるかのように大きく歳が離れていた。

ちなみに、父は私のことを「マクちゃん」といつも仇名で呼んでいた。そこにはいかにも父らしいエピソードというか、ちょっとだけ風変わりな事情が絡んでいる。

だったが、父から「マクちゃん」とひ弱な声で呼ばれるのは生理的に好んではいなかった。

私が外出好きな少年になつたのは、自宅の構造のせいだけではなく、実は伯母の存在が深く絡んでいる。物心がついたときにはすでに我が家に居ついていたこの伯母のことを私はひどく嫌っていた。伯母は洗礼を受けたクリスチャンで、月に何回か決まって肉類を口にしない日があった。食事の前になると必ず胸に手をあわせ、口の中でぶつぶつ何かを唱えてから箸を手にしていった。こう書くと、いかにも伯母は熱心なクリスチャンだったように思える。だが本当はそうではなかった。伯母には人を許すというおこないがまるで欠如していた。生来のエゴイストだったのだ。しかも外見上でも敬虔なクリスチャンとはとても思えず、髪は紫色に染まり、指先には大きく派手な緑色の指輪がいつも輝いていた。

伯母が肉を食べないと決めていた日に、たつた一度だけではあるけれど、うっかり母がすき焼きの用意をしてしまったことがあった。父は東京本社出張していて不在だった。伯母はいそいそと自室から出てきて食卓に用意してあった牛肉を見つけると、一転して目を吊り上げながら髪を振り乱し、肉が盛られた皿を畳の上いきなりぶちまけた。母は反射的に自らの不注意に気づき深く詫びた。子供心ながらに私は母をひどくかわいそうだと思つた。

第二次大戦中、父は徴兵を逃れるために小さな軍需工場を営んでいた。特に自由主義者であつたわけではないが、戦争に邁進していた当時の国風にまったくなじめなかつたらしい。裕福な家庭の末っ子として誕生した父は幼いころからわがままに育てられ、大変な食道楽でもあつたから、物資に欠乏して自分の好きなように身動きひとつできない戦時下の状況に、きつと耐えがたさを感じていたのだらう。そんな窮状をようやく解放してくれたのは、皮肉なことに父を耐乏生活に追ひこんだはずのアメリカ軍そのものだった。びつたりとした軍服にパイプを咥え、飛行機から悠然と厚木飛行場に降り立つたマッカーサー將軍の勇姿をはじめて見たとき、父は彼を救世主のごとく感じたようである。自分にも男の子ができたなら、この將軍の愛称（マック）にちなんだ名前をつけようと決意した。

終戦後、軍需工場をたたみ、会社に就職した父は昭和二十五年、群馬県の高崎市に支店長として赴任する。その町で東京の下町から疎開したまま家族と暮らしていた母と見合いをし、一目惚れして挙式した。翌年、希望どおり長男の私が生まれた。私は父にとってようやく授かつた男の子だった。父は私を雅公（まさきみ）と命名したけれど、自らすすんで「マク」と読み替えることで、將軍への憧憬を、自分の息子の名前の中に予定通り塗り込んだ。「マック」となるように。私は自分の名前を決して嫌いではな

そんなこともあつて、私の胸の内にはこの初老の女に対する恐怖心がしっかりと根を下ろしていた。いつのことだったか、小学校の作文の時間に、伯母のことを「鬼が島に住む赤鬼」だと書いて、人のことをこんなふうに悪く言つてはいけない、と教師から注意されたことがあつた。また小学校も高学年になつたころ、食事の前にお祈りをして伯母を見て、（今日も美味しいご飯にありつけた。明日はもっと贅沢なご馳走にありつけますように……）と実は祈っているのではないかと感じたことも何度かあつた。こんなふうであつたから、私は少しでも伯母と顔を合わせなくても済むように野球に打ちこんだ。

私が見知らぬ少年にグローブを奪われるという、その「小さな事件」が起こつたのは小学一年生の夏休みで、ちょうど私が楽しみにしていた『ほんほん』と呼ばれている夏祭りにはじまる少し前のことだった。

大人にとっては些細な事柄が子供にとっては重大事であることがしばしばある。子供は彼特有の感受性で自分が遭遇した事象の重要性を巧みに振り分け、それぞれに反応して対処していくものらしい。それはたいていは無意識のうちには汲み取るものであるが、その正確さは大人の比ではない。後年になって、私はその出来事に対する父の言葉がいつまでも脳裏に焼きついて消え去らないでいる自らを見出

した。父のそのひと言は、父と母のどちらを選び取っていきべきなのかという判断基準を、後々私にきちんと形成させた。

その日、私は嬉々とした表情で岸本君や仲間が集まっている広場へと走っていった。私の腕の中には、前の日に父に買ってもらったばかりの外国製の黒い牛革のグローブがしっかりとした感触で抱き締められていた。だれも彼もが牛革のグローブを持てるような裕福な時代ではなかったから、真新しいグローブが間違いない子供たちの注目の的になるであろうと私は察していた。きっと優越心の一種だろう。

松本城のすぐ前にある広場に、夏の遅い夕暮れが舞い降りるまで、たしかに私は子供たちの熱い視線を感じていた。私の周囲には「どんな些細なミスも決して許さないぞ」というみんなの妬み心がびっしりと立ちこめてもいた。ほんの数時間だけでも完璧なプレーヤーでありつづけなければならぬという強迫観念に私は今にも押し潰されそうだった。だが麻酔にでもかかったのであろうか、不思議にミスを犯さなかった。

そんなふうには気を張っているうちに、門限の時間がようやく訪れた。「そろそろ帰るよ」とみんなに告げると、私より二つくらい年上で、子供たちをリードしていた少年が私のほうに歩み寄ってきた。「君のグローブ、僕に貸さな

いか？」と少年は淡々とした口調で言った。「貸しちゃ駄目だよ、マク」と岸本君は私を制した。私は少年を見つめながらしばらく考えた。だが結局黙ってグローブを手渡した。数時間におよぶ緊張の連続と、自尊心を守り抜こうとする努力のために疲れ切っていたし、一刻も早く家に帰り、少しでも楽になりたいとだけ思っていたのだ。

「君の家はどこ？」と少年から再度尋ねられ、私は振り向くと『T生命』と書かれていた大きな看板を無言で指差した。少年は、分かった、という感じで軽く頷くと、グローブを大切そうに空に向かって高々と掲げながら広場へと走り去った。数人の子供たちが大きな歓声を上げながら後ろを追いかけていった。私はその光景を見送りながら、何かとてもよいことをしたように思った。

結局、少年は何日経ってもグローブを返しにはこなかった。考えてみれば少年の名前も住所も何ひとつ私は知らなかった。後日同じ広場で再会することもなかった。でも私は私の宝物になるはずであったグローブを失ってしまったという寂しさはあってもなぜか裏切られたという感覚は少しも持たなかった。グローブを手にした少年と、その後ろ姿を子供たちが無邪気に追いかけていったあの黄昏の光景が十分な満足感を与えていたからである。

グローブが盗まれたことを知った伯母は「あんたの癖が悪いから、マクみたいに物を大切にしない子供ができるん

だ」と母を非難した。伯母は物質に対する執着心が人一倍強いほうだったのでひどく腹を立てていた。きつと他人事とは思えず、自分が損をしたとしても思ったのだろう。母は理不尽な伯母の糾弾に、「でも義姉さん、お兄ちゃんは決して物を大切にできなかったのではなくて、人をきちんと信用して盗られただけなのよ。どこがいったいいけないの」とちゃんと抗議してくれた。むしろ伯母は母の主張を認めなかった。私も内心では母と同じことを考えていたが、まだ伯母が怖くて反抗できなかった。

夕食の直後のもめごとだったので父も同席していた。父はいつものように濃厚なビースの煙を室内に充満させながら、やや不機嫌に黙っているだけで妻や子供である私を一切かばおうとはしなかった。丸い眼鏡を光らせ、ひたすら座卓の表面にコンコンと小刻みに爪を打ちつけていた。父は普段から何ごとがあっても怒鳴るような瞬間はなく、まして暴力をふるうようなことも決してない穏やかな人だったが、私は、たとえ自分のほうに過ちがあったとしても、伯母の追及から守ってもらいたいと思っていた。それなのにいつこうにそうしてくれないのは伯母が怖いからなのか、だったら男らしくないじゃないか、と父の態度をいささか奇異に感じた。

伯母の叱責は執拗だった。母はひたすら黙って耐えている。ちなみに耐えるという姿が、私の子供のころの母の率

直な印象だった。ほどなく台所に立ち、一人になって黙々と食器を洗っている母の後ろ姿に、ぐっと唇を結んで一心に堪えようとしている気迫を確実に感じ取った私はそれまでになく母を近しいものと感じた。そんな母に、私は自分と同じ気持ちを抱えて生きている者への連帯感をきつと手にしたのだろう。その瞬間から私は母を単に優しく美しい女性であると認める以上の気持ちを抱きはじめた。

その夜、久しぶりに父が私を風呂に入れてくれたときのことだった。石鹸を泡立てて息子の体をこすっていた父が不意に私に訊ねたのだ。「マクちゃんはなぜ知らない子供にグローブなんか貸したの？ 他人なんてね、簡単に信用するもんじゃないんだよ」と。

父の言葉は私にはとうてい理解できない不思議な内容を含んでいた。「いいかい、マクちゃん」と父はやや強調した言葉づかいで言い直した。「他人はぜつたいに信用しては駄目だよ。それが君のためなんだよ」。それは私を軽く咎めたつもりという言葉ではあったが、父の本音でもあった。

私は熱い湯で体を流してもらいながら、ついさっき父が語った言葉を何度も口の中で繰り返し唱えてみた。しかしいくら考えても、「他人を信じること」がなぜ間違ったことであるのか、まるで理解できなかった。その晩、はじめて私は父を心から不快に思った。

風呂から出た私はいつもより無邪気に自分の本心を偽り、母の持つバスタオルの中に飛びこんでいった。私は嫌な言葉を吐いた父に当てつけるつもりで母に甘えた。甘えながら少し躊躇している自分自身を感じ取っていた。何か打算的なものを父と母に同時に求めているように思えて、なかなか寝つけなかった。外国製のグロブをたったひとつ手にしただけで仲間を優越心を見せつけようとした自分。そのくせ見知らぬ少年を信じてしまった愚かな自分。グロブを奪われた出来事で、まったく対照的な反応を示した父と母。伯母の罵声。——さまざまな事柄が急速に私の頭の中で混乱していた。

夜も深まって、そろそろ朝になろうとしているころ、私は恐ろしい夢を見て泣き出してしまった。母はただ泣いてばかりいる私につき添って、とうとう朝まで眠らずにいた。その晩見た夢を私はかなり明確に記憶している。

『何か悪いことでもしたのであろうか、私は近所の小母さんや仲間たち、それに父や母や伯母に取り囲まれて孤立している。私はさかんに自らの正当性を弁解するのだが、だれも耳を貸すどころか、かえって冷淡に見くだけただけだ。父は煙草をくゆらせ、母は沈黙して立っている。不思議なことに伯母だけが優しく笑っている。私は見知らぬ男から金属製の檻のような箱を積載した車に乗れと圧迫を受ける。男は野犬狩りの保健所職員によく似ていた。必死に抵抗す

るが、私はとうとう檻の中に閉じこめられてしまう。檻にすがりついて私は泣きじゃくるが、みんなは冷酷に反応するだけだ。ほどなく車はゆるゆると動き出す。檻の奥には数人の子供たちがうずくまっている。長い一本の道が緩やかに遠のいていき、私は流れ去っていくはるかな光景をじっと見つめている』

私はこれと同じパターンの夢を中学生の後半に至るまで幾度となく見た。この中には何か私の本質的な部分が隠されているのではないかと、実は今も考えている。

それから二、三日間、私の気分は沈みこんでいた。それでもやがて待ち望んでいた『ぼんぼん』がはじまった。私は一人で祭り見物に出かけた。グロブを奪われた日からその日までのたった数日間がひどく長いものに感じられてならなかった。

当時の『ぼんぼん』は近ごろのサンパ調の楽曲に乗って賑やかに実施されている同名の祭りとは、まったく趣が違っていたように思う。昔の『ぼんぼん』は明らかにもっと厳かであり、しかもどこか悲しみに満ちた歌に彩られていた。今でも憂鬱な気分には浸っていると、ふとこの歌が口について出てきて驚かされることがある。それほど『ぼんぼん』の歌は子供心にも哀切な響きを立てて聞く者を悲しくさせた。

ぼんぼんとて今日明日ばかり

あさってはお嫁のしおれ草

しおれた草をやぐらに載せて

下から見ればぼんぼんの花よ

上から見ればなさけの花よ

ぼんぼんの花は散っても咲くが

なさけの花は今日明日ばかり

夏の夕暮れ、山からようやく涼しさを運んできたそよ風に髪をほつらせながら、柔らかな和紙やティッシュで折った花弁を指先につけて提灯を持ち、年少者から順に並んで夜道を練り歩く行列が燈す仄かな明かりは、松本の古風な佇まいと溶けあって私の目にうつすらと涙を浮かべさせた。私は『ぼんぼん』の歌が底部に持つ深い意味まではよく理解できていなかったが、何か人と人との悲しい別れが哀切な節の奥に隠されているということだけは分かっていたと思う。

それまで無自覚であった自分をはじめめてぶつかったさまざまな疑問に私はあの晩以来ずっと動揺しつづけていた。父の放った言葉が耳にこびりついて容易に離れていかなかった。そういう私の沈んだ心持ちの小さな襞に『ぼんぼん』の歌は痼のように深くしみこんだ。『ぼんぼん』の歌は夏の宵の中でいつまでも揺れていた。実際に後日、その歌が

あたかも基調低音のように私の耳元で鳴り響き、私のものの感じ方そのものを支配していた時期が訪れる。だがそれはまだずっとあとのことだ。

『ぼんぼん』を見物にいった夜、私は家に帰ると、父と母が茶を飲んでいるところに走っていき、突然「僕はお父さんもお母さんも好きだ。忘れないで欲しい」と口早に告げた。あまりに突飛な息子の言葉を聞いて、父も母もしばらく茫然としていた。でもすぐに狂ったように笑い出した。それがまた私の心を深く傷つけてしまった。おそらくその年の夏を境に、私の感受性は少しずつ過敏になっていたのだろう。

翌日はひどく暑い日だった。私は朝食を済ますと一人でまず城にいった。木陰のベンチに腰かけて、堀の中のほとんど水枯れして干からびてしまっている土の亀裂をぼんやりと眺めていた。ほどなく、私をあの白昼の居眠りにも似た不思議な無意識状態の時間が襲ってきた。私はたしかに堀端のベンチに存在している土の亀裂を見ていたはずだった。だがいったい何をどのようにして眺め、どんなふうに物音を聞き分けていたのか、かなり長い時間におよぶ記憶がすっかり抜け落ちていた。あるいは私は疲れ切っていたのかもしれない。

ふと気づくと、私は妙な気分のまま城をあとに小学校の方角に向かって歩き出していた。歩きながら学校の裏門前

を流れている深志川ふかしがわの橋のたもとで、いつも絵を描いて売っていた、とある老人の姿を思い出した。深閑と静まり返った校庭を横切り、ほどなく橋についた。老人はいなかった。老人が莫座もくざを敷き、正座で座っていたその場所は、晴天なのに暗鬱な感じだけを漂わせていた。私は所在ない気分のまましばらく佇み、湿潤な魅力に満ちていた「蔵」のことを考えた。なぜか背後から忍び寄ってくるあの恐ろしさを味わいたいような不思議な衝動にかられた。しかし肝心の岸本君は母親の実家に帰省中で、私の希望はすでに絶たれていた。実は帰省とはほんの口実にすぎず、本当は彼の両親が別居中だということに私は薄々気がついていて、ふと岸本君の泣き声を聞いたような気がした。

私は再びぼんやりと歩き出し、橋の中ほどまで進むと、赤い欄干にもたれかかって川の清流を眺めた。けれどもすでに自分の居場所をすっかり見失っていた。不意に「マクちゃん」とだれかが呼んだように思って顔を上げた。だが土手に沿って、くねっている舗装道路だけが川面に反射した光をさらに屈折させて無為に白く輝くばかりだった。どこにも人影など見当たらない。(こんな日に、あの劣等生がいたら、さぞかし気分が紛れるのに……)と私はよからぬ想像の世界にしだいに深くのめりこんでいった。

私はどちらかと言うと本来的にはよくいる優等生タイプタイプの少年だった。級友たちの前では、担任教師に可愛がられ

夏の日差しと、ただ揺らめいて現実から遠ざかっていく逃げ水の姿だけだった。

それから長い間私に空白の時間だけが支配していた。意識を欠落させた私はおそらく影のようになって白日の町並みを通り抜け、当時の自分が直面していた子供なりの現実からの逃避を淡く夢想しながら歩きつづけていたのだらう。その後、父のあの懐かしい煙草の香りに自分自身をようやく見出したとき、私は見知らぬ温泉町に一人佇んでいた。

その小さな町は私がかつて一度も訪れたことのない寂れた湯治場だった。シヨート・ピースのあの馴染のある香りは道端に腰を降ろして休んでいた金魚売りの老人が吸っている煙草から流れ出していた。リヤカーの荷台にはたくさんの金魚鉢が載せられ、名前の分からない金魚がわずかに尾ひれを揺らしながら泳いでいる。鉢の水はぬるみ、ふくらんでいた。夏の眩い光を受けてガラスの縁が煌めいている。蟬の鳴き声が一瞬だけ大きく響き、やがて遠のいていった。老人は午睡をしていた。指先にはさまれた煙草から青い煙がゆるゆると立ち昇り、午後の時間の推移を危うくしている。

私はやや落ちつきを取り戻し、温泉町の竹まいを注意深く観察した。しばらくして、いつの日だったか、たしかに一度確実にきたことのある町であるようにふと思った。そ

ている自分に、何の疑問も感じていないかのように作為的に振る舞っていた。しかし裏側では、そういう自分の姿にたまらないほどの劣等感を抱いていて一人悩んでもいた。とはいえ、一度みんなから貼られてしまった優等生というレッテルはなかなかはがれるものではない。私は時折大きな苛立ちを密かに爆発させた。その矛先はたいいは劣等生たちに向けられた。

さらにどうしようもないことに、私はいじめた劣等生に、後日必ず「宝物」を与えて意図的に優しく振る舞ったりもした。中でも私が一番可愛がっていた劣等生は晴れた日も長靴だけしか履いていない貧しい身なりの少年だった。私はその子にしょっちゅう当たり散らしていた。でも彼は一切逆らおうとはしなかった。彼のお目当ては私の宝物の中で、もっとも貴重品である蛇の墨絵だった。私は彼のそういう内心の希求を知り抜いていた。

その墨絵は老人がたつた一本の筆を使い、墨の濃淡を巧みに駆使することによって蛇の鱗がくつきりと浮かび上がっている不思議な代物だった。でも一年生がもろう小遣いではちょっと高額だったから、私は少しずつお金を貯め、何とか数枚だけは手に入れていた。

あの色紙を一枚与えさえすれば、きっと私の言いなりになって、あの子は何でもしてくれるはずだ。でも老人も少年もそばにはいなかった。辺りに漂うのは暑く照りつける

これはあの晩見た夢の中で、どこまでもつづいていた道のある風景であるようにも感じられた。不思議にあの瞬間の恐怖心は襲ってはこなかった。それどころか、かえって温かく優しい息遣いが聞こえてきそうな気さえた。

私は、あの横丁を曲がれば幼稚園の手前に煙草屋があり、店先には広口瓶の中にシヨート・ピースの濃紺の優しい箱がたくさんおさまっていて、私がいかにするのをひたすら待っていてくれるのではないか、という気持ちになった。(そうだ、いつだったか、お父さんのために買いにいった煙草屋がきつとあそこにはあるはずだ)。私は急に嬉しさがこみ上げてきて涙をこぼした。



バブルの開発ラッシュは人を狂わせる……
土地には地霊が潜み、代々の人間が心血を注いで守り育てて来た土地を、いたずらにいじりまわし、迂闊に利用しようとするれば、必ず災厄が降りかかり、その人間を危機に陥れる——土地の開発では人が死ぬ……

「いつか、たしかにきたことのある町」。——それは「既視」という現象であるかもしれない。実際に走って行って横丁の角を曲がると、不思議なことに想像どおり幼稚園も煙草屋もあった。私はますます嬉しくなって、長い間歩きつづけてきた疲れを忘れた。

これと同じ心的状態を私は後日もう一度だけ体験している。そこには父か母か、もしくはその両方のイメージが必ずまとわりついている。いやもつと正確に述べるなら、それらのイメージと私自身の関わりの方が必ず深く結びついている。おそらく私は他者との関係に何らかの理由でひどく疲労しているとき、白昼突然眠りに落ちこむような心的状態に陥ってしまい、このような、かつてきたことがあるという既視体験をするのだろう。

見覚えのある煙草屋の前に立つと、ポケットから小銭を取り出し、シヨート・ピースを一個買った。私はその「青い箱」を手にした瞬間、重い気分からようやく解放されつつある自分を知った。遅くなって偶然町を通りかかった父の部下のスクーターに乗せられてやっと家に帰った。朝、家を出たときはほとんど正反対の少年が、スクーターの座席に座っていた。母は夕方になつてもいつこうに帰宅しない息子を心配して、社員の人たちと手分けをして捜し回っていたから、帰るなりひどく叱られた。素直に仕方ないと思つた。それよりもポケットの中に隠し持っていた煙草

事がいつまでも長く揺曳していた。

秋も深まったころ、私の家はそれまでに経験したことのない濁った淀みに突如支配されてしまった。父が名古屋に愛人を作ったことが不意に発覚したからだ。伯母と母は当然父を糾弾した。私は寝たふりをしながら三人の口論に聞き耳を立てていた。だが父はのりくらりととはぐらかして反省する様子を一切見せなかった。家人に非難されればされるほどいっそう深く浮気に傾斜していった。

岸本君がごたごたの末、結局再婚した父親に引き取られて生家に戻ってきたその年の暮れ、私が父にもらったクリスマス・プレゼントは『野球盤』だった。私と岸本君は一緒に蔵に籠り、長い間野球盤で気を紛らわせた。二人とも何かに夢中になつていなければ、平常心をまるで保てなくなつていった。岸本君は新しい継母とうまくいかないとしばしば嘆き、私は私で父の浮気騒動にすっかり気が塞いでいた。野球盤の鉛の玉は想像以上に重く、盤上のパネ式のバットをいくら上手に弾いても、二人の思いどおりには「ホームランの穴」の中に入つてはくれなかつた。鉛の玉の迷走はあるいは私と岸本君の心模様そのものであつたのかもしれない。

*

の箱の存在感がひどく気になつていった。私は父の部屋まで一目散に走つていった。

父はいつものように漆塗りの座卓の前に胡坐をかい座りながら、細くとがった顎を天井に向けて突き出し、両切り煙草の濃密な煙を口と鼻から同時に吐き出していた。ピースの煙が天井に近い欄間から廊下のほうに重い流体となつて溢れ出している。父のヤニに染まつた右手の指先は絶え間なく動いていた。支店の業績の計算をしているのか、あるいは道楽に使う金をどこから捻出したものか黙考でもしているのだろうか、指先を小刻みに動かす仕種は父の極めて特徴的な癖だった。

私が部屋に入つていくと、父はちらりと私を見て「駄目じゃあないか、マクちゃん」とだけ呟いた。私は照れ笑いをしながら頃合いを見計らつて、ポケットの中のシヨート・ピースを差し出した。頷くと父は「お駄賃をあげよう」と言つて百円紙幣を一枚くれた。

私がスクーターの後部座席に座りながら、楽しい空想を巡らせていた時間はそんなふうにあつて終つてしまつた。けれども私は満足していた。父をたとえ二、三日でも疎ましく考えた自分自身をいけないう子供だと反省した。そうして座卓の横にきよとんと座っていると、一日中歩き回つた疲れが一気に噴き出してきて、いつの間にか眠つてしまつた。夢の中で、その日に起こつた、さまざまな出来

翌年の三月、父は名古屋支社長を任命され、私たち家族は何度目かの引越をした。「支社長」という要職は名古屋と大阪にしか置かれていなかった。辞令を受け取つた父は顔を赤く染めて珍しく興奮をあらわにした。きつと大抜擢とか大栄転とか呼ばれる人事だったのである。私は「いつまでも文通するからね」と約束して泣く泣く岸本君と別れ、月に一度、名古屋から松本に必ず手紙を送つた。むろん返事はすぐに来た。たいていは嘆きの文面だったけれど。私の家族は名古屋で「独立した一戸建ての住宅」というものにはじめて住んだ。やつとこのことで職と住が切り離されたわけだ。だがだからと言って、これでようやく、ごく人並みの普通の生活を送れる、とは決してならなかつた。この転勤がもともと強かつた父の浮気癖と、贅をつくした欧米志向にいっそうの拍車をかけてしまったからである。「一日でも早く欧米並みの豊かな暮らしがしたい」というのが父の口癖だった。父はその時分から自らの言葉をつぎつぎと実践していった（間隙をぬつて女遊びも続けた）。

パンは母が毎朝手ずから焼いていたし、ジャムはわざわざ東京の千疋屋から父が取り寄せた珍しい果物を使つていた。父は有名な洋食レストランに頻繁に通い、私や妹や母に西洋料理の王道の味とマナーを覚えさせた。さらに外食に飽きると一気に方向転換し、フルコースに近い洋食を母に作らせて自宅で堪能した。父のそういう身勝手とも言え

る方針に母は美によく応えた。伯母からの手厳しい料理批評にもひたすら耐え、母は料理上手な妻に変身していった。父は服装にも人一倍うるさい人で、三つ揃いの背広やコンビネーションの靴を全部オーダーメイドで揃えていた。おまけに二ヶ月に一度は家族全員を引き連れて、信州や飛騨の内風呂つきの温泉宿に泊まったりもした（おそらく出張と称して愛人も出かけたのだろう）。要するに、私と妹がしまいにはげんなりとしてしまったほどの贅沢三昧だったわけだ。そういう生活のどこが不服なのか？ と反論されると私には返す言葉がないが。

伯母は父に負けず劣らず贅沢好きな女だったから、父の敷いた路線にいたく感激した。伯母は裕福な外交官の男と結婚し、外国で長い間暮らしていた。子供がいない気楽さも手伝ったのか、海外への赴任中は麻雀や社交ダンスやトランプ遊びに日がな一日打ち興じ、掃除や洗濯などの日常生活はすべてメイドに任せて自分では何ひとつしなかったらしい。母の話によると夫婦専用のシェフまで雇っていたそう。そんなわけで、母の作る手料理を伯母はめったに褒めなかった。

父に言わせると、欧米志向の生活を実現するための費用は人生に不可欠な「消費」であって、決して「浪費」ではなかった。父は当時国民が心酔していた高度経済成長の、さらに一歩先を明らかに目指していた。もちろん今から考

母の混じりこまない純粋な家族構成でもあった。

そんなころ松本から一通の訃報が届いた。あの岸本君が「蔵」の中で首吊り自殺を図り不意に死んでしまったのだ。私は母の許しをもらい名古屋に出てくるときに通った鉄路を逆に辿り一人で葬儀に出た。遺書がないから原因は不明だと岸本君の父親は私に言った。両親の不和が原因に決まっているんじゃないかと腹が立ったが口にはしなかった。私はプロ野球カード（ガムの中に一枚ずつ入っている、選手の顔写真付きデータのようなもの）を棺の中に入れてもらった。それは遊撃手の広岡だけが抜けてはいたが、巨人軍のレギュラー級が八人揃った私の一番の宝物だった。父親に頼みこんで、私は「蔵」の中に入り涙が枯れるまで泣きつづけた。そんな泣いたのはあとにも先にもその日だけである。

私が小学五年生になった四月、父は突然大阪支社長に抜擢され、私の家族はまたまた大急ぎで大阪へ転居した。会社員としての最高の地位をついに掴み取った父は有頂天の境地に入った。それが父をよりいっそう狂わせた。

大阪の街というのは、「別の場所からやむを得ずやってきただけ」の私の目から見ると実に奇異な構造を持っていた。真夏ごとの暴動と売血で有名になった釜ヶ崎の貧民街からやや南に向かつてしばらく歩いただけで、そこにはま

えれば、それはいささか早すぎる父の傲慢さだった。でもそれだけなら私も家族もまだどうにか苦笑いで父をやりすごせたのだったが、事態はそれからほどなく私たちの想像をはるかに越えて一気に暗転してしまったのだった。父がとうとうよそに愛人を囲ってしまったからだ。

たぶん父が生まれつき保持していた性墮のようなものがきつとそうさせたのだと思う。あるいはそれも高度経済成長がなせるわざかもしれない。豊かになりすぎた反動の一種でもあるだろうからだ（やや同情めいて言えは、父の悲劇がそこにはあった）。だがいずれにしろ、我が家にはそれまで以上に暗く不穏な翳りが色濃く漂ってしまった。朝目覚めると、そこにいるべきはずの父の姿が白いシーツの上にはなく私はしよちゅう妙な不安に包まれた。やがて肝臓を患って半月ほど学校を休んだ。

そのころになると、いつ転勤があってももう二度と狼狽（うろた）えないで済むように、私はクラスの子供たちとあえて深く交わらないと密かに決めていた。それは自らの平常心を守り抜くためにどうしても必要な転校生の鉄則だった。私は冒険小説や漫画に深くのめりこんでいった。あるいはゴム巻き式の紙飛行機に夢中になって、叶いっこない夢を一人青空に描いた。叶いっこない夢とは、決して転校しなくとも生きていける自らの境遇であり、不倫騒ぎの断じて起こらないごく普通の家庭生活だった。そしてまた、他人（伯

るで正反対の手塚山という、いわゆる山の手の高級住宅街が広がっていたからだ。

私の家は手塚山と釜ヶ崎のほぼ中間地点の天下茶屋にあった。そこはごちゃごちゃとした下町の雰囲気と、やや気取った山の手の気分が微妙に混じりあった実に「変な町」だった。喩えて言えば、お好み焼きや蛸焼きのソースの匂いとバジルの香りが皿の中で奇妙に融合している料理に近い。その界限は「猥雑な混沌さ」といういかにも大阪らしさを町自らがよく体現していた。それは松本の旧家を持っている孤立した気高さとも、東京のよそよそしさともまるでも次元の異なる、人間の存在感が沸騰しているある種の温床のような世界だった。だが私はこういう大阪の暮らしと関西弁にまったくなじめなかった。生理的に受けつけなかったと言っても過言ではない。

しかし、さすがに学校の中ではそうとばかりは言っておれなかった。関西弁を喋らないで学級に溶けこむのは至難の業だった。私にとつて大阪は「排他の街」だった。関西弁を使わない人間は例外なく仲間外れにされた。私はあの鉄則「クラス内に友人を作らない」を修正する必要にやむなく迫られた。ではよかったが決して好きではなかった勉強にまず熱を入れた。級友たちの尊敬をてっとり早く買おうと図ったからだ。それはすぐに功を奏し、学期末の成績発表では常に上位に位置するようになった。逆に意識し

て三枚目を演じ、授業中でもわざと冗談を飛ばして、おもしろい少年に見られるように気配りもした。私の目論見はまんまと成功し、通信簿には「ユーモラスで明るい優等生」と書かれるようになった。

私がそんな路線変更を余儀なくされた原因にはやはり父が深く絡んでいる。父は大阪に転動したものの名古屋で囲った愛人とは手を切っていないかった。週末になると家を不在にして名古屋に出かけた。父のいない家は母がどのように努力しようが暗く停滞していた。家の中がそういう状態で、かつ学校でも孤立していたら、いかに覚悟を決めたはずの私でさえさすがに神経がもたなかった。私はさんざん考えた末に校内では自分が楽にすごせるようにあれこれ画策した。それが「優等生」と「おもしろい少年」の結合という虚像だった。

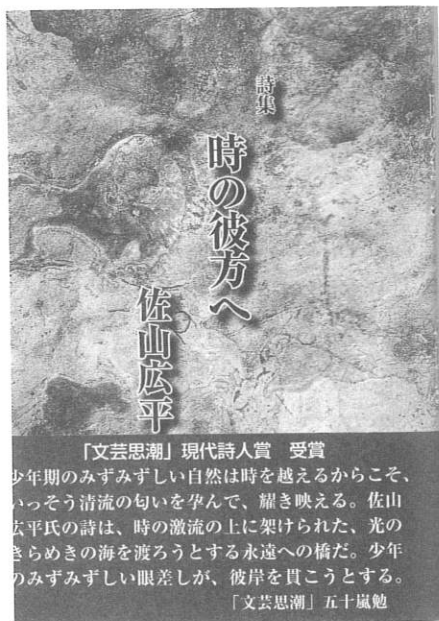
小学五年生の秋、私は自分が描いた絵画で大阪市から銀賞をもらい表彰された。『家族の理想』という題で、「父に肩車してもらった私が棒を使つて粟を落とし、妹と母が木の下で待ち構えている」という構図の水彩画だった。かつて実際に経験した場面をそのまま絵にしたのではあったが、それはすでに遠くすぎ去つたはずのよき時代の光景でもあった。けれど私はどうしてもそういう趣旨の絵が描きたかった。そんなふうに、私はさまざまな場面で自らの虚像作りに奔走した。

さまざまな心労が積みかさなつたせいだろうか、私は原因不明の蕁麻疹にかつたり、重い偏頭痛に悩ませられたり、激しい胃痛に襲われたりして体調を大きく崩した。やがてちよつとしたことで伯母とやりあつてしまうような不機嫌な少年に変貌していった。たぶん十代を迎えたことで、自らの自我や意識が高まり、ものごとの本質がよく見えるようになったという事情がそうさせたのだと思う。あるいは父や家庭に対する憤懣を伯母一人に収斂させることで、自身の平衡感覚をかううじて保とうとしていたのかもしれない。

父の名古屋通いは日を追うごとに頻繁になつていった。その時分になつて、なぜ伯母が父と同居するようになったのかという理由を私は遅まきながらやつと知つた。伯母にはかつて、夭逝した両親の代わりに弟である父の面倒を見て大学や生活の費用を何かと用立てていた時期があつた。父は世話になつた分の恩返しをするために、夫に先立たれた姉をやむなく引き取つた。だがそこには別の原因もある。むろん伯母の父にも勝る浪費癖だった。

伯母の夫は「おまえが一生困らないで暮らせるだけの金は遺してある」と遺言して亡くなつたらしい。だがその豊富な遺産を伯母は何とわずか数年間で使い切つてしまった。だから切羽つまつて父のところへ転がりこんだ、と言つたほうがむしろ真相に近いだろう。父も「世話になつた分な

私を「マクちゃん」と呼ぶ父のひ弱な声の不潔なものとして私に認識されるのにさほど多くの時間は必要ではなかつた。名古屋の愛人の家から戻つてきたときの父は、不思議なことにならぬ汚れ物をそのまま持ち帰つてきて必ず母に洗濯させた。まるで「ただの出張から戻つたのだよ」と宣言しているかのように私には感じられた。当然母や伯母は父を非難した。だが父はそのたびに、ただひたすら黙りこくり、いつものように煙草の煙をくゆらすだけだった。私にはそういう父の姿は卑怯者としてしか映じなかつた。父が愛人宅から戻つた翌朝、母が父と同じ布団の中で眠っているのを私はしばしば見かけた。母の姿は子供心ながらに一種の痴態として瞞の裏に強烈に焼きついてしまった。なぜ母は自分を裏切つて愛人を作つた男と一緒に寝なければならぬのだろうか？ いくら考えてもまるで理解できなかった。正直、母のそういういかにも女としか言いようのない哀れな姿——あくまで私見だが——に私は同情よりはむしろ失意に近い感情を抱いた。それは私と母の、暗黙の内の連帯を瓦解させるに足る奇態でもあつた。そういうことへの繰り返しを父をいつそう憎く思わせた。けれど私の痛恨の思いはほどなくかるうじて消え去つた。母が父に対して潔癖さを守り抜き、決して同じ布団の中で眠ろうとしなくなつたからだつた。



少年期のみずみずしい自然は時を越えるからこそ、いつそう清流の匂いを孕んで、輝き映える。佐山広平氏の詩は、時の激流の上に架けられた、光のきらめきの海を渡ろうとする永遠への橋だ。少年のみずみずしい眼差しが、彼岸を貫こうとする。
『文芸思潮』五十嵐勉



明治文学の草創期に彗星の光芒を放つて文芸批評の先駆をなした若き文豪斎藤緑雨。樋口一葉の才能を早くから鋭く見抜き、「私たちが願っているのはあなたの大成です」と平直にぶつけた早世の批評家の軌跡を、群像新人賞受賞文芸評論家がここに蘇らせた。學生の「斎藤緑雨」文芸評論集。
アジアカルチャー

ど、この十年でとつくと返したさ。十分すぎるくらいは贅沢を僕は姉さんに与えた。違うか」と、ときどき本気で怒っていた。

伯母の苛立ちがそのころから急に過度になった。伯母は「贅沢な生活をするためにはこの男しかいない」と信じていたはずの父が反抗的な態度を取るようになったことで、安泰だと信じて疑わなかった自分の居場所、大きな不安を感じはじめたのだらうと思う。そういう身勝手な目論見が父の行状によって、しだいに窮地に追いこまれていったわけだ。そんなふうには伯母は父にすがる以外には生きて生きようがない女になっていた。

ほどなくクリスマスがやってきた。十二月は伯母にとつてもっとも忙しい時期だった。恵まれない子供や困っている人々に教会を通じて奉仕活動をするからである。だが私はそういう伯母の慈善事業をはなから疑っていた。

その晩、私と伯母の対立は一気に頂点に達した。きっかけは奉仕活動を終えて帰宅した伯母が母の料理した鶏の骨付き腿肉の焼き加減に、さんさんいちゃもんをつけたあげく、人一倍貪り食べたからだだった。「がつつくなよな、みつももない。少しは貧しい人に分けてやったらどうなんだ」と私は伯母に非難を浴びせた。伯母は私の言葉に一瞬にしてかっとなり目の玉をひんむいた。青ざめた顔の皺が一気

に吊り上り、こめかみに青筋が立った。「何だって、マク？」と赤い唇が大きく裂けた。伯母が手に持っていた鶏の足から肉汁が滴り落ちていた。「やめなさい、お兄ちゃん」と母は私を叱責した。父はちよつとびっくりしたようだったが、いつものように籠甲の眼鏡を光らせながら、ピースの紫煙を口から吐き出すだけだった。何も言葉はなかった。

「あなたの慈善事業なんかじゃなく偽善事業って言うんだ」と私は言いつつ、「身のほど知らずって言うのさ、おまえみたいな子を」と伯母も負けずに食ってかかった。私はその直後、伯母が吐き出した言葉を忘れたことがない。

伯母は言った。「あなたはそこにいる女を母親だと思っているんだらう」と。「やめて」、母の悲痛な声が壁を突き刺した。煙草を持つ父の指先が少しだけ震えた。

「マク、おまえもおめでたいね。葉子はあなたの母親ではあるが妻じゃないんだよ」

それだけは堪忍して、とたぶん言おうとして母が喉をつまらせた。母ではあるが妻ではない？ 私には伯母の言っている意味がまるで分からなかった。私は伯母をにらみつけた。

伯母は母を目で制止しながらさらに言った。「いいか、マク。おまえの母親は名古屋に五郎が囲った愛人とまったく同じ身分なんだよ。籍なんか入っちゃいないのさ、正式

な夫婦じゃないんだ。分かるか」

母がわつと泣き崩れ、妹が母の懐に飛びこんで激しく怯えた。父は白い頬を一気に紅潮させ、煙草を灰皿で揉み消した。喉仏がピクンと動いたが声は出さなかった。

伯母は手に持っていた鶏の足を皿の上に放り投げた。「おまえの父親の正式な妻は今もって他人の女なのさ。大学時代に結婚して籍を抜かないまま、いまだに放置している戸籍上の妻がちゃんといるんだよ。おまえみたいな子供を『認知の子』って言うんだ。よく覚えておくんだね。まだあるぞ、おまえには姉が一人いる。腹違いの姉だ。おまえも葉子も、葉子の親戚も、みんな五郎に騙されたんだ。悔しいか、マク」

私は反射的に伯母に向かって箸を投げつけ、部屋を飛び出した。私の背中を伯母の怒声が貫いていた。

「マク、どうだ、分かったか、おまえら兄妹はみんな愛人の子なんだ」

それからどのくらいの時間が経ったのだろうか。ふと気がつくと、毒々しいネオンと屋台の看板が錯綜する原色の街の中を、私は行き場を失った漂流者のようにひたすらさまよっていた。周囲に充満する濃厚なソースの匂いが私の臭覚を脅かし、通天閣の赤いロゴ・マークが陽炎のように揺れながら視覚を歪ませた。そして私の心情をあざ笑うか

のようにクリスマスで賑わう街の雑踏は奇妙な活気に溢れ、キヤバレーの呼びこみの声やジングルベルの騒々しい旋律が聴覚をも怪しくした。

さっき伯母が言い放った『愛人の子』と『腹違いの姉』という二つの言葉が、耳孔の奥で幾重にも乱反射していた。父は本当に母や親戚を欺いて暮らしていたのだろうか、籍が入っていないということは四大家族の中で母だけが苗字が違うのか、なぜ父は前妻の籍を抜かないのか、伯母は腹立ち紛れに嘘をついたのか？ 疑問の洪水が私を襲った。歩き疲れ、私はなかなば意識を失いかけていた。頬にこびりついた涙を拭い、おぼつかない視線でようやく迎りを見



ひとつひとつが独立した小説でありながら、全体が一個の大きな小説を形成する——。三十余年紡ぎ続けた壮大な仕掛けを読む。

定価(本体2,000円+税) 風蝶社

回した。不意に見慣れた懐かしい町の様相に出会ったような気がして立ちどまった。そこは明らかに「いつか、きたことがある町」だった。松本で迷子になった、あのときの記憶がとっさに頭のどこかを通り抜けた。ショート・ピースの芳香が不意に漂ってきて鼻をくすぐった。父の大きな存在感が自分の背中を沈潜していく気配に思わず悪寒を覚えた。繰り返し浮かんでくる父の像を打ち消そうとした。だが忘れようとするほど、父の存在感がええって大きく私を覆いつくしてしまった。

偽物だった父の優しさ。「マクちゃん」と呼ぶあのひ弱な声。その父が、なぜ、かつてきたことがある町と、私を再びかさねあわせねばならないのだろうか？ 私はあまりにも残酷すぎるじゃないか、と恨めしく感じた。皮肉なことに、目の前の横丁を曲がると、私が確信したとおり、赤地に白抜きで「たばこ」と書かれた旗が立つ煙草屋があった。父に対する気持ちに大きな変化こそ生じていたが、何もかもが松本の出来事とよく似ていた。

私はめまいしながら、すっかり分からなくなってしまった家に向かって歩き出そうとした。

あの湯治場で感じた温かく優しい息遣いなどまるで聞こえてはこなかった。「クリスマスケーキは要らへんか」と叫ぶ売子の子の甲高い声はるか遠くに感じられた。辺り一面に漂うソースのこつてりとした匂いが鼻を気色悪く刺し

た。父の焦げて黄色く変色した指先から発散してくる、あの強い煙草の香りが背後から私を包みこみ、さらに深く拘束してしまうだろうと思えてならなかった。

私は町から逃げ出そうとして一気にかけ出した。音や匂いや街の像が束になって背後を追いかけてきた。どうして父だけがあんなに身勝手に振る舞えるのか？ 母はなぜ父のわがままと不誠実さをそのまま放置しているのだ？ 私は家族を裏切りつづけている父の自由さを限りなく憎らしく感じた。そのとたん、また涙が溢れてきてすべての視野を奪っていった。

「血の繋がりになんて信じるものか！」と私は歯噛みした。家族なんて、赤の他人がひとつ屋根の下でただ暮らしているだけじゃないか、岸本君のような親友のほうはるかに信じられる。人は家族である前にまず人として存在しているのではないか？ 絆とは本来そういう者同士だけが結びあうものじゃないのか？

私は『ぼんぼん』のあの哀切な旋律を一瞬だけ聞いたような気がした。魂にも似たものが街の雑踏の中で、再び大きく揺曳した。さまざまに思い出に満ちたあの濃紺のショート・ピースの箱を買おうとは、もちろん夢にも思わなかった。

受賞の言葉

室町 眞

あの震災以来、家族の繋がりと他者との絆とかいうもの大切さがマスメディアを中心に、数多く提言されている。それはそれで、たしかに本質的には素敵なことだろう。だがいささか「浅薄な標語」に成り下がっているのではないか、という疑問をどうやっても払拭できなかった。

家族にはまさに家族でなければ経験しえない煩わしさや面倒が多々存在しているじゃないか。——そんな思いを頭のどこかにしばしば明滅させながらこの作品を書き進めた。

これは実は私の処女小説で、大学生のころにその初稿は



むろまぢ しん

室町 眞

1951 群馬県生まれ

76 法政大学文学部・日本文学科卒業
版下屋、海外旅行代理店に勤務後、通信制美術学校で、漫画家やイラストレーター志望の人々と面談をする、ちょっと変わった営業職を経験。そのことが大きな刺激となり、55歳で小説を再び書きはじめる

2009 銀華文学賞優秀賞

10 長塚節文学賞優秀賞

12 銀華文学賞優秀賞 ほか

現在はパートの『お掃除おじさん』
落ち葉が舞う公園を綺麗にするのは、けっこう気持ちがよいものだ

書かれている。それからおよそ四十年が経過した昨年の暮れ、今現在の自分の筆力で書き直してみたいと、ふと思いついた。しかしながら改稿すればするほど何が抜け落ちていくという「所在なさ」からは容易に抜け出せなかった。

おそらく言葉の精度とか構力とかいう技術的な問題ではなく、初稿を書いたころにはたしかにあったはずの、自分の柔らかな感性というものの行方が気掛かりだったのだらうと思う。二十歳のころに自分が保持していた繊細さは明らかに変質してしまっている。たぶんそれが年月というものだろうし、二度と帰れない「過去」という場所でもあるのだらう。それならば、老いてから、新たに獲得したものとは何か？ 今はまだよく分からない。

年明けに、いったん稿了したが、銀華賞の規定である五十枚を大幅に越えていて、後半部分を削る作業に、かなり難儀した。そのことがこの作品の致命的な欠点になっているのではないかと自分では考えているが、はたしてどうだろうか。もともとは長編にすべき題材だから、選評が楽しみでもあり、また怖くもある心境だ。

ともあれ、自分の原点ともいうべきこの作品を推し進めてくださった審査員の方々に深く感謝いたします。自分の創作活動に限界を強く感じていた時期だけに、この受賞は励みになりました。ありがとうございました。

赤い眼

神通明美

JR石和温泉の駅舎を出ると、熱気が瑞枝を包んだ。

「盆地だからね、暑さはそっちよりきついと思うよ」

博子からはあらかじめ電話で、そう聞かされていた。しかし、ただ暑いのではなく、むしむしする。

駅前には、店の数が少なく人の姿もまばらで、宿の数が百軒を超える温泉郷の玄関口だとは思えない、うら寂しさであつた。

それでも、家並みの間を縫うようにして葡萄棚の緑が広がる風景は、五時間前に富山から出てきた瑞枝の目には新鮮で、これも俳句の材料になりそうだ、と思いつつ眺めていると、間もなく軽のワゴン車が前に停まり、窓から博子が顔を出した。

博子は、柔らかいけどことなく意志の強さを感じさせる声で言い、

「今日はどうするの？」

緑なし眼鏡をかけた化粧気のない顔をこちらへ向けた。

「特に何の予定もないけど。駅に着いてすぐに義弟に電話をしたら、本人は元気で、手術は予定どおり明日の午後一時半からだから、義姉さんは朝病院に来てください、って言ってたし」

「じゃ、このまま夕食に行こう。マンションはここから車で四、五分だけど、行つてるとそれだけ時間が取られるから」

博子は車を発進させ、駅前のロータリーを出るとすぐに広い道を走った。

瑞枝が博子のマンションに泊めてもらう話になったのは、七月初旬のことである。

「妹が子宮筋腫で八月の初めに手術を受けることになった。それで、義弟一人じゃ大変だろうと思ひ、付添いに行くことにしたんだけど、夜にでも会えない？」

と瑞枝が電話をすると、

「どこの病院？」

「山梨県立中央病院」

「じゃ、ちょっと離れてるけど、わたしのマンションに泊まったら？」

「暑いのに待たせちゃったわね。ごめん」

そのあと車から降りてきたのを見ると、ベージュ色のノースリーブのTシャツにカーキ色の膝上丈の綿パンという姿であつた。剥き出しになった肩や足はいい色に焼けている。

「引越して忙しい最中だったんじゃないの？」

自分から受け取ったポストンバッグを車の後ろ座席に入れている博子の背に向かって瑞枝は聞いた。

「ううん。一応、生活できる程度には片付いたから。それに、この暑さでしょう。そんなことばかりしてたら疲れちゃうよ。一息入れるのにちょうどいいの。ごたごたしてるけど、気にしないでね」

と博子言い、

「ううん。そんな迷惑かけられないよ。泊まるのは、ビジネスホテルが共済施設にするから」

と瑞枝が断ろうとしても、

「迷惑？ そんな水臭いこと、言わないでよ。ここは温泉よ。ねえ、そうしたら？ ただし、そのころはまだ引越しの荷物が片付いてないかもしれないけど」

博子は強引とも言える言い方で更に誘ひ、瑞枝もそれ以上拒むのは悪い気もしたから、

「じゃあ、お言葉に甘えて」

と、泊めてもらうことにしたのである。

が、電話を切ったあと、また心配になった。

博子が温泉付きのマンションを購入し他人に貸しているということは、三年ぐらい前に聞いていた。そこに引越したということは、いよいよ自分で使うことにしたのである。なんにしても、一戸建ちの家とマンションと、二軒家を持つてなんて羨ましい。当初はただ単純にそう思っていた。けれども、そのうち、気になってきた。セカンドハウスにしているのだろうか。それとも博子一人で住んでいるのだろうか。

電話の口ぶりからは博子一人のように思え、他人事ながら心配になるのだった。

博子とは東京の大学の同じ学部で学んだ。共にワンダーフォーゲル部員だったから、関東周辺の山や沢も一緒に歩いた。が、大学を卒業すると、博子は東京から二時間のこの地で中学校の社会科の教師になり、瑞枝は郷里の富山で中学校の国語の教師になった。いつの間にか音信も途絶えていたのだが、十数年前、東京で催された同窓会で再会してから再び手紙や電話のやり取りをするようになった。二人とも散文を書いたり俳句の趣味があることから、作品を交換したり、その感想を述べ合ったりするようになったのである。

博子の結婚相手が窶元かまもとの三代目で、大学の非常勤の講師だと知ったのは、その同窓会のときである。さすが博子を選ばずパートナーは違う、きつと充実した生活なのだろうと勝手に想像していたのだが、それがそうでもなさそうに思えたのは、マンションを買ったと聞いた一、二年前かもしれない。電話をしても博子ที่บ้านにいないことが多く、あるとき電話口に出た夫と思われる男性が不機嫌そうな声で言ったからだ。

「いつ帰るか聞かれても、ちよつと見当がつきません。なにしろ、どこへ行くとも、いつ帰るとも言わずに出掛けていくんですから。ああ、何かリュックを持っていたようだから、山へでも行ったんですかね。とにかく何が何だかさっぱりわからん女でして」

四、五十日を要するとも聞く。それを女一人でやるというのは並大抵のことではないと思えたからだ。

歩きながら考えたいことでもあったのだろうか。

そして、その疑問は未だに解けていない。

帰って間もなくマンションに引越したことを考えると、どうもそのことと関連があるように思えるのだが……。

博子の説明が切れたとき、瑞枝は周辺から聞いてみた。

「八十八カ所巡り、全部歩いたの？」

「そう」

「どうだった？」

「おもしろかった」

おもしろいとは、予想もしなかった言葉である。

「様々な人の様々な暮らしに出会えたから。それに、化石を拾ったり、泥棒に荷物を盗られたり、いろんな出来事もあったし」

「そう。……じゃ、俳句は？ いい句ができた？」

「うん。全然だめ」

これもまた、意外な答えだった。「吟行に行くど百句ぐらいはすぐできる。ただし、使いものになるのは十句あるかなしだけ」——常日ごろ、博子はそう言っていたからだ。

実際、一緒に歩いていてもなかなか句が作れない瑞枝の横で、博子は、こんこんと湧く泉のように、次々と完成度

車は坂道を上ってゆく。右手には鬱蒼と樹木が繁り、左手眼下には夕焼けの紅を刷いたかなり水量のある川が流れている。

「この川に沿って温泉宿が点在しているの」

「もう少し奥へ行くと見応えのある渓谷があるよ」

助手席にいる瑞枝を退屈させまいとして、ハンドルを握りながらも、自分の住む土地についていろいろと案内する博子の心遣いを有り難く思いながら、瑞枝は一方で、白衣に菅笠という博子の遍路姿を思い描いていた。

四月の初め、博子から葉書がきた。

〈共に定年退職、お互いに乾杯を！ さて、十年くらい前から考えていた四国八十八カ所巡りに出発します。俳句のことも考えながら楽しんできます。あなたは？〉

という文面で、消印からすると、遍路の旅に出る直前に投函したようであった。

ああ、やっぱり実行したんだ。というのが、それを讀んだときの感懐だった。定年退職したら遍路に出るというのは、去年の同窓会で既に聞かされていたからだ。

が、そのあとすぐに考えた。一体どうした気持ちからそのようなことをしようと思いついたのだろうか。

四国八十八カ所には、遍路ころがしと言われる厳しい坂道や人家の少ない辺地があるという。徒歩で巡るとなると

の高い句を作ったものだ。その彼女が「全然だめ」とはどいうことだろう。

「まあ、投句の締切りが迫ってるから、少しずつ思い出しながら作ってはいるけど」

「へえ。あなたにしては珍しいことね」

そのときには作れなくても数年後に作ることもある瑞枝とは違い、博子は「その時その場所でないとは作れない。あとは作れない」というタイプである。

「結局、何日間、旅に出ているの？」

「出発したのが四月三日で、結願の寺、大窪寺に着いたのが五月二十九日。予定したよりずっと日数がかかってしまったのは、雨の日が多くて途中、風邪を引いて三、四日休んだのと、松山で子規や山頭火の遺跡を回ったりしたから」

「どおりで。わたし、五月の中旬にもお宅に電話をしたのよ。そうしたら、ご主人かしら、男の人が電話口に出られて、実は長い旅に出ましてねえって。で、いつごろお帰りになりますかって聞いたら、さあ、わかりません、だいたい、生きているのか死んでいるのか、それさえ知らせてこないんですから、って」

気分を害するかもしれないと思い、ためらいながら言ったのだが、

「ああ、そうそう。彼、みんなにそう言ったらしいよ」

博子は前を見たまま淡々と言った。

車はいつか林道を走り、退避所のようなところで停まった。既に車が二台駐車している。

「食事の前に滝を見ていこうよ。簡単に行けるわりに、いい滝があるから」

博士に促されて車から降り、踏み固められた道を谷へと下りていくと、三十歳前後の男と子供二人が話しながら上がってきた。多分、博士の言う滝を見て来たのだろう。さらに下りていくと、岩魚釣りにでも来ていたのか、釣り竿を持った男二人がやってきた。それっきり人には会わなかった。瀬音が高くなり、鯛の音が、湖畔に打ち寄せるさざなみのように断続的に聞こえてくる。見下ろすと、日がささない谷底は既に紫紺色に沈んでいた。

瑞枝は心細くなった。若いころはどこへでも一人で出掛けたものだが、最近では、恐ろしい事件を見聞きすることが多いせいか、悪いことばかり想像し、怖じ気づいてしまう。

ひと一人が通れるだけの吊り橋をそろそろと渡り、川原へ下りる道を行くと、ようやく滝が見えてきた。高さ二十数メートルを一気に落ちる滝で、青緑色の滝壺は白く波立っている。

「最近全然雨が降ってないの。雨のあとだと、あの肩の辺りなんか高く盛り上がって、けっこう迫力があるんだけど」

見ると、

「そう。みんな、なんと、いい人ばかりだろう」

博士はすっと目をそらし、

「向こうは好き嫌いが激しくてね」

と言って、青黒く霧り始めた川岸を見つめた。

みんなとは、俳句の仲間か、四国八十八カ所で出会った人たちかもしれない。向こうとは多分、夫のことだ、と瑞枝は思った。

しかし、夫のことをそんなふうにいきなり持ち出すとは、いったいどういうことだろう。

別居しているとはいえ、今もなお、夫のことは、彼女の頭の中で未整理なまま渦巻いている、ということか。

「ということは、肉を一切食べないとか？」

「ううん、豚肉は食べるよ。だけど、魚がね、食べるとしてもシヤケだけで、それも口が曲がりそうな塩辛いものではないとだめ。それから、野菜にはあまり包丁を入れるな、だとか」

「ああ、要するに、食事のことではうるさいわけ？」

「そう。そのくせ、わたしが仕事で遅くなっても、自分で作って食べていたことは一度もない」

博士には似合わない愚痴であった。しかも口調はかなりきつい。

「食べ物に好き嫌いがある人は、人の好き嫌いも激しいと

博士が反り返るようにして滝を見た。

「滝を詠むのは難しいと言うわね。既に名句が作られているから」

「例えば、後藤夜半の『滝の上に水現れて』なんか？」

「そう」

「あれ、すごい写生句だよ」

「ほんと。それから、秋桜子の『群青世界』だとか」

「ああ、その句碑、那智の滝で見たよ」

瑞枝は岩に腰を下ろした。滝のしぶきで飛散する太陽の光に目がくらんだのか、立っていると体が揺れる気がした。座ると、霧でも出てきたのか、川面は藍鼠色あいらねにぼやけていた。「こういう空のこと、帯の幅の空と言うんだって」

博士が横に座り、滝から空へ目を移した。

瑞枝もつられて、空を仰いだ。

兩岸に切り取られて細長い空の、かすかに残る紅を見上げてみると、JRを乗り継いでやってきたばかりの自分を博士はどうしてこんな寂しいところへ連れてきたのだろう、という疑問が浮かんできた。

少しでも俳句を作らせようとしてだろうか……。

「食べ物の好き嫌いはある？」

博士が聞いた。

「ううん。別に」

いきなり何の話だろうと思いつながら瑞枝が博士のほうを

言うわね」

「そう。だから、友達はほとんどいない。なにしろ兄弟とも喧嘩してる人だから」

「じゃ、お子さんたちとは？」

「ほとんど話さない」

ぶつきらぼうに言って振り向いた目は焦点が定まっていない感じで、口角はへの字に下がっていた。

「だけど、夫婦仲が悪いのは子供にはよくないね」

靴の先で岩を蹴りながら博士が言った。

「そんな人だということ、結婚する前にわからなかった？」

「わからないよ。付き合ったのは、ただの二カ月だから」
言い捨てるように言って立ち上がった博士は、川原に転がる大きめの石の上を上り、そこから滝に向かって歩き始めた。石の上から石の上へ、まるで綱渡りでもするかのように、右に左に体を揺らしながら。

その後ろ姿を眺めて、瑞枝は思った。

博士は今のようなことを言いたくてこの滝の前に自分を連れてきたのだろうか。

「大学を卒業して二年ばかりしてだったか、ワングル部のOBで薬師岳に登ったこと、覚えてる？」

車を停めた場所へ戻ることになり、林道への道を上っていると、瑞枝は後ろから来る博士に聞いた。川原で岩に

腰を下ろし、瀬音を聞いていると、そのときのことか思い出されたのだ。

「覚えてるよ」

「関東からは博子と常田先輩と彼の友達のこと……」

「榎本君？」

「そう、榎本君。関西からは川瀬君とか五、六人が参加して、たしか、新穂高温泉から薬師岳に登り、信濃大町に下りたんだっただよね」

何気なく話しながら瑞枝は一方で、当時抱いた淡い恋心を思い出してた。山にいる間に榎本に対する思いが募り、山から下りたあとも二、三年思い続けたことを。

「あのとき、途中の沢でテントを張って、キャンプファイアの周りで恋愛や結婚や政治や経済の話をしたこと覚えてる？」

「覚えてるよ」

「あのころ、博子、まだ、川瀬君と付き合ってたんじゃないの？」

「……だったと思う」

「だから、わたし、二人の間はどうなってるんだらうとやきもきしてたんだけど」

博子と川瀬の仲は仲間たちにも公然のものだった。

「うーん。だけど、もう、あのころは……」

博子の声が急に遠くなった。後ろを見ると、五メートル

そんなにも年の離れた夫婦というものが一体どういうものなのか、夫と同級生だった瑞枝には見当がつかない。一緒に暮らしているうちに、そうした開きなど全く覚えなくなるものなのか。それとも、時々、否応なくその開きを覚えさせられるものなのか。

それに、三十五歳で夫を亡くした瑞枝には、六十、七十になった夫との生活は想像がでない。

それでも、瑞枝はたまに思ったりする。生きていたらあの人は、浮気の一つもしただろうか。年を取るにつれて気難しくなっていただろうか。そして、わたしは夫に幻滅し、別居や離婚を考えることもあっただろうか……。

「そのくらいも離れていけば大事にしてくれるって周りは口を揃えて言ったけど、現実とは全然違ってた。人生やってみなきゃ、なんにもわかんない」

「……………」

「県展って、文化祭みたいなもの、毎年するでしょう。こここの審査員は中央から名士みたいなのが来るんだけど。結婚してすぐのことよ、手びねりのね、ちよっとしたものをを出してみたら、入賞しちゃったのよ。それを、夫がね、喜ぶどころか、嫉妬というかあ、もう、それからは土を触ることさえ許さないの。そのくせ、お客さんが来ると、『こいつは何々先生に気に入られた器を作ったんです』って話してるの。瑞枝、夫婦って一体何なの？ スタートが恋愛

ばかり向こうで、崖に生える草を引き寄せて何やら観察している。最近、植物同好会のようなものに加えし菌糸植物か何かを調べている、ということも言っていたから、そうしたものでも目に入ったのかもしれない。

やがて、手から草を放し、道を上がってきて言った。

「あのころはもう、そろそろ終わりだと思ってたような気がする。わたしって、どうも好きな人とは結婚できない運命みたい」

「じゃ、御主人とは、お見合いということ？」

「うん。というか、祖母の紹介でね。わたしを我が子のよに育ててくれた」

なるほど、そういうことだったのか、と瑞枝は思った。

大学時代、瑞枝は博子から、度々、彼女の祖母のことを聞いた。それによると、その人は大変な芝居好きで、歌舞伎や文楽などによく博子を連れていったという。我が子のよに育ててくれたとはどういうことか、そのへんの事情はわからないが、その祖母に勧められて断れなかったということなのだろうか……。

「何年生まれ？」

「ああ、向こう？」

「うん」

「昭和七年」

「……ということとは、十歳近く離れてることかね」

でも見合いでも、結局は運命共同体じゃないの？」

「……………」

「全くのところ、夫はバトラーでもアシュレでもなかった」

夕食にはイノブタの溶岩プレート焼きを馳走になり、そのあと十階建てマンションの八階にある博子の家へ案内された。

玄関に入ると、右手に備えつけの下駄箱があって、その上に陶器が数個飾られていた。素朴さと温かさを感じさせる手びねりの大皿やコーヒーカップで、渋い色の釉薬の上から大胆な筆使いで秋草のようなものが描かれている。

「これ、あなたの作品？」

「そうよ」

「ということは……………」

言いかけて瑞枝は、口をつぐんだ。そのあと土を触ることさえ許されていないということは、これが県展に入賞した作品ということだろう。しかし、夫との不和の原因となったものをどういう気持ちで並べているのか……。

「どうぞ。入ってきて」

博子の声に促されて廊下を行くと、右側にトイレとバスルームがあり、その向こうがリビングとダイニングキッチンで、更にその奥に洋室と和室があるという造りだった。洋室にはシングルのベッドが一つ置かれている。

「あなたの部屋はそっちの和室。どうせ遅くなると思って布団も敷いておいたんだけど、寒かったらそこにあるものを自由に使って」

あてがわれた部屋にスーツケースを置いて、網戸越しに街の灯を眺めていると、

「ちよつとこつちへ来てみない？ 多分、あなただったら興味があると思う」

博子がバスルームの前に行き、手招くように言った。行ってみると、その前にも部屋があつて、壁面は天井から床まで、がっしりとした本棚になっている。

「すごい本棚ね」

「特別注文して造らせたのよ」

「それに、この蔵書、大変なものじゃないの」

歌舞伎や俳句、動植物の図鑑など、それもほとんどハードカバーのもので埋まっている棚を興味深く眺めていると、「塞土関係の本は向こうに残してきたの。夫は読みもしないだろうけど。お客様の手前、全集なんか、多分、箔のつもりで応接間に飾ってるんじゃないかな。夫にとつてはわたし自身もそんな飾りもの一つにすぎないだろう、そう思ったこともあつたわ」

博子は、押しやった過去のもろもろを引き戻し、また押しやるかのように言った。

翌朝、バルコニーに出ると、左手には薄藍色に霞む山が聳えていた。その下には一面、葡萄棚と桃の畑の丘が裾を広げ、目の下には鴨の遊ぶ澄んだ川が流れている。

「ここは複合扇状地といって、理科では有名な土地なんだって」

バルコニーに置いたテーブルの上にテーブルカバーを掛けながら博子が言った。「こうして高いところから見ると、川が山を削って扇状地を造っていくことがよくわかるでしょう」

朝食はパンとサラダと五目卵焼きというメニューで、「飲み物は、ヨーグルトと牛乳を好みで混ぜて召し上がれ」ということであつた。

食べ終わったころ、博子がA4の用紙を持ってきた。

三十句ばかりの俳句がワープロで印刷されたもので、題名は「花遍路」となっている。

「あら、作ってるじゃないの」

「だから、最近になって少しずつできてきてる、と言つたじゃない」

「一句目がいいわね。それから、この『青き踏む』というのも」

読み進みながら、瑞枝は一方で思っていた。

博子はこうした生活をずうつと前から夢見ていたのになかろうか。心ゆくまで空や山や川を眺め、自分のために、

して申し分なしと言えるのだろうか。

博子が離婚をしたいのならそうすればよい、と瑞枝は思った。

瑞枝は、夫が亡くなったあとも舅姑と一緒に暮らしていた。自由になりたいと思いつながら、言い出せずに十五年間も過ごした。が、五十歳になったとき、思い切つて家を出た。不本意な人生を送つては、悔いを残すと思つたからだ。それに、瑞枝の本心をいつの間にか感じ取り、気を遣つている子供たちのためにも我慢はよくないと思つた。ところが、今はまた舅姑と同居している。十年、気兼ねなく生き、人知れず恋もし、簡単に言えば、気が済んだ感じなのだ。六十歳という年齢は女にとって最後のスタートラインかもしれない、と瑞枝は思う。体力の衰えを感じ始めてはいても、今ならまだやれると思うことができる最後の踏切り板ではなかろうか。

妹の手術は、ほぼ予定されていた時間で終わった。

主治医から手術が成功したことを聞いた義弟は、目尻にうつつすらと涙を浮かべていた。両親が早くに亡くなり兄弟姉妹もいない義弟にとつて、妹はただ一人の家族なのだ。消灯時間まで付き添うという義弟に後を託して病室を出ると、博子が病院の玄関前に迎えに来ていた。

手術が無事終わったことを告げると、

あるいは仲のよい友人を招いて、心を込めた食事をつくる。行きたいところがあれば気兼ねなしに出掛け、ある日は閉じこもつて読書や俳句作りに専念する。そうした生活をマシオンを買つたときから、いや、もしかしたら、それより前の、遍路に出ようと思ひ始めた十年くらい前から望み、定年になったらそれを実現しようとして着々と準備を進めていたのではなかろうか。博子の子どもたちはそれぞれ独立しているという。ならば、この先どのように人生設計するか、それは博子の勝手、他人がどうの言うことではない。

妹の手術は予定どおり始められた。

ストレッチャーに載せられて手術室に入る妹を見送つた瑞枝は、病室に戻つて手術の終わるのを待った。

手術の成功を念じているのか、目を閉じている義弟のそばで同じように目を瞑っていると、昨日滝の前で聞かされた博子の半生を語る言葉の切れ切れが蘇つた。雨に濡れながら山道を一步一步踏みしめるように歩く博子の遍路姿が儼然と浮かぶ。

博子の夫が受話器の向こうで不機嫌そうに言った言葉を思い出してみた。

「さあ、何が何だかさっぱりわからん女でして……」

確かに博子には掴めないところがある、と瑞枝も思う。

しかし、それを他人に言つて平然としている夫は、伴侶と

「そう、それはよかったね」

と、博子は身内のことのように安堵の色を見せ、車をマンションの方向とは別の方向に走らせた。

「大切な時間をわたしのために使わせて悪いわね」

と瑞枝が言うと、

「そんなこと、気にしないで」

博子はやんわりと叱りつけるように言う。

人家の間の細い道を走り、桃の畑や葡萄棚の間を通り抜けていくと、やがて四車線の道路に出て、視界が急に広くなった。高原で、右手には薄青く連峰が見えている。稜線に見覚えがあつて眺めていると、博子がそのほうへ目を投げて言った。

「あの山、あなたに見せたくって」

それは、大学卒業後、博子と二人で登ることを何度も計画し、日が合わなかったり急用ができたりして果たせなかった八ヶ岳であった。

高原のレストランで夕食を食べ、マンションに戻る道で博子が言った。

「この町の学校に三年ばかり勤めたことがあるの」

見ると、道沿いに民家や商店が並び、その裏にも点々と灯が見えている。ここまで通うの大変だったんじゃないの、と瑞枝が聞くと、

婚してくれと言っても多分、向こうは外間があるから応じないと思う。そうすれば調停とか裁判とかということになり大変なエネルギーが要るじゃないの。駆け落ちまでした友達かね、婚費分担から始まって十年がかりでようやく離婚したの。それ見てて、そのエネルギーを別に使えばいいのにつて、つくづく思ったのよ。わたしね、戸籍は日本人的分類で、苗字や名前は単に符牒にすぎないと思うの。それに、離婚しても特にメリットがあるとは思えないし」

博子は何度も考えた末の結論を復唱するように言い、

「だって、このままでも年金は自分のがあるじゃない。健康保険だって、住所変更して世帯を別にすれば、夫の扶養から離れて自分だけの国民健康保険証がもらえるのよ。死んだときは子供たちが何とかしてくれるでしょう。わたしには、死後のことまで考える余裕なんて全然ないわ」と、達観しているとも投げやりとも思える口調で言った。

翌日、妹は点滴をしながらトイレに行けるようになった。消化のよいものなら何を食べてもよいということ、博子が作ってくれた素麺を義弟と一緒に食べて人心地がついた顔の妹に安堵して病院を出ると、博子は玄関先で待っていてくれた。そして山梨名物という手打ちうどんの「ほうとう」を御馳走してくれた後、山のほうへ車を走らせた。

二車線の国道をどのくらい時間走っただろうか、博子

「通勤時間は片道一時間足らず。だから、時間的にはさほどでもないんだけど、日陰の坂道が多いから冬場は神経を使つたわね。それなのに向こうは、授業があるときには大学まで送らせるの。そのためにわたしは遅刻しそうになつて。だけど、わたしが足に怪我をしても一度も送ってくれなかった」

またしても、似合わない愚痴であった。

「そんな人だと、博子がいらないのは何かと困るでしょうね。食事の用意なんか、どうしていらつしやるか……」

取り残されて茫然としている男の姿を思いながら言う

「何とかしてるんじゃないの。そんなふうを考えること自体、おかしいよ」

博子が強い口調で言った。驚き、そつと横顔を窺うと、思いなしか、眉が上がり、唇が突き出ている。

「ああ、それはそうよね。確かにそのとおりだわ」

瑞枝は慌てて取り繕つたが、そのあと、思い切つて聞いてみた。

「じゃ、離婚するの」

「ううん。今のところ、それは考えてない」

意外な言葉に、

「そう。離婚はしないんだ」

と、瑞枝がつぶやくように言う

「今はね。それだけのエネルギーを使いたくないのよ。離

が車を人家の間の細い道に入れた。車がすれ違うのも難しいと思える細い道で、上り坂になっており、カーブが多い。走るほどに家の灯は少なくなり、道の両側は荒れた杉林になった。目を凝らすと、左側は山で、右側は谷のようである。

「どこへ行くの」

怖くなって瑞枝は聞いた。

「あなたに鹿を見せようと思つて」

瑞枝は、六月の末に博子を送ってきた俳句の一つを思い出した。『わちの蕨野の夜目にも白し鹿の尻』というもので、瑞枝はすぐに「脱帽」と書いた手紙を博子に送つたものである。それにしても、人里からまだそんなに離れていないこの辺りで鹿を見ることなどできるのだろうか。

「三段角を持った大鹿がね、道の真ん中にすくつと立っていたりするの。若い鹿が二、三頭、一緒にいることもあるよ。きよとんとした眼でこつちを見ているの。夜中でも眼が赤く光るからよくわかるのよ。うまくいけば、猪やりすや兎や狸に出会うこともあるよ」

車が横に揺れ、時々、上に突き上げた。舗装が剥がれたり、ひびが入っているのだ。それでも、博子は同じスピードで走り続けた。

瑞枝は不安になった。こんな悪路を軽四の車でこのように早く走って大丈夫だろうか。人家もなく、ほかに車一台通らない道で、何かあつたらどうするのだろうか。

車の揺れがひどくなり、時々、石の撥ねる音がした。舗装が切れて砂利道になったらしい。

「この道、本当は去年整備されることになってたの。だけど、この不景気で中止になっちゃって……」

杉林の向こうが青白く光った。麓で花火を揚げているのだろうと思っていると、間もなくまた光り、稲光だと気づいた。音もなく光り、荒れた杉林を黒く浮き上がらせる。瑞枝は縮み上がった。博子は平然と言う。

「この上に昔牧場だったところがあるの。その辺りまで行けば必ずいると思う」

けれども、いくら行っても杉林は切れず、牧場らしいものも見えてはこなかった。

「あれは民宿。七月の初めに一度泊まったことがあるの」
博子が指さす左前方を見ると、杉林の葉陰に滲むように電灯の明かりが見えている。

「で、そこのおかみさんに赤い眼の話をしたら、あんたって普通じゃない、変わってる、って言われちゃった」

それはそうだろう、と瑞枝は思った。そんなことを言い、こんなふうに行動していたら、だれだって同じように言いなくなるだろう。

「だけど、あの眼、ただの眼じゃないよ」

「という、と、どういう……」

薄気味悪くなって瑞枝がこわごわ聞くと、

たの。そして、その向こうにはどこまでも続く明るい道があるようにね。それで心が決まったの、何としてもマンシヨンに住もうと。変なことを言うようだけど、鹿の眼って、夜見ると、赤く透き通って、玉のように見えるのよ。玉って、持つてるだけで力をくれるというじゃない。その力を、あ のとき、わたし、もらったのかもしれない。とにかく、あの眼、あなたにも一度見せたいのよ」

瑞枝はマンシヨンへ帰りたくなった。何にともなく怖くなってきたのである。稲光がしたときに杉林の間を何かの影が走り過ぎたような気もする。

けれども、前をのぞき込むようにして車を走らせる博子を見ると、なぜかそれは言えなかった。

瑞枝は諦めた。こうなったら最後まで博子に付き合うしかない。

ようやく両側に黒く聳え立っていた杉木立が切れた。

「ここが牧場。この辺によくいるんだけど」

博子が車を止め、身を乗り出して前を見た。

瑞枝も同じように目を凝らした。が、それらしい影も赤い眼も見えない。博子がライトを遠くへ投げた。茫茫と広がる草原が青鈍色に浮かんた。風があるのか、穂草が揺れている。

「初めて見たのは、ここなんだけど」

けれども、それらしい影も赤い眼も見えない。

「遍路の旅から帰って一週間ほどして、わたし、言ったのよ。家を出てマンシヨンに一人で住むって。そうしたら、おじやおばまでが嘴を入れてきて、それでごちゃごちゃになっちゃって、もう面倒になったから、家を飛び出したの。で、この道を行ってたら、遠くの行く手に小さな二つの赤い光が見えて、それがゆっくりと動いていくの。何だろうと思っって車を停めて見てみたら、鹿の眼だった。それで、これはよいものを見た、これを何とか句にできないものか」と

「なに？ あなた、そんなときにも悠長に俳句を作ろうなんて考えるわけ？」

「そう。ところが、そうなるも今度は、俳句についても全く理解しようとしないう彼の態度がまた思い出されて」

「……という？」

「あなたにも見せた『鹿の尻』の句だけど、県の俳句連盟の大会に応募したら入賞したのよ」

「それはそうでしょう。確かにいいもの」

「ところが、向こうはちつとも喜んでくれない。それどころか、まぐれだろうとせせら笑ってた」

「それ、もしかしたら、やつかみじゃないの」

「そうかもしれない。で、そんなことを考えてたら、何とていうか、周りの闇が本意に生きてきたこれまでの暮らしに思え、赤い眼がこれから進む方向の道しるべに見えてき

博子が車をウターンさせ、右にライトを投げた。

「見えないね」

一メートルばかり下に車を移動し、今度は左を照らす。

「見えないね」

稲光がした。遠くで雷が鳴っている。

「稲光や雷が鳴ってるから鹿も怯えて出てこないんじゃないの」

もうこれ以上は付き合えないと思いつつながら瑞枝は言った。それでも、博子は答えず、闇に目を凝らしている。

ようやく赤い眼が見えたのは、博子が泊まったという民宿に続く、今はもう荒れ放題の開拓小屋の近くまで来たときであった。

「いた！」

博子が押し殺した声で言った。

その目のほうを瑞枝も凝視すると、確かに藪の中に二つ眼が光っている。黄色みを帯びた赤い眼で、見入ると玉のように透き通っていた。

瑞枝は思わず目をそらした。

が、博子は息を詰めてじっと見入っている。

瑞枝は恐る恐る、もう一度それを見た。

魂まで吸われそうな奥深い光だった。

翌朝、瑞枝は中央本線の下り列車に乗っていた。

妹の手術が無事に終わり、その後の経過も順調なので富山に帰ることにしたのだ。

窓際の席に座り、列車で旅をするときにはいつもそうしているように、テーブルを出し、その上に歳時記と句帳を置いた。

しかし、窓の外へ目をやり、俳句の材料になりそうなものが見つかる、それを単語や短い文章の形で句帳に書き付けるところまではしているのだが、それを句にしようにすると、なかなかうまくいかない。

むしろ、葡萄棚や桃の畑が人家の上に今にもなだれそうに広がっている風景を眺めていると、その土地で過ごした三日間のあれこれが思い出されてきた。滝を前にして、あるいは車の助手席で思いがけなく聞くことになった博子の半生が思われた。赤い眼についてただの眼じゃないと話していた博子の上擦った声が耳に蘇った。見入ると魂ごと引き込まれそうな気がした赤い眼が瞬に浮かび、瑞枝をじつと見入ってきた……。

瑞枝は思った。博子は今夜もあの山道を走っていくのだろうか。そして、少しずつ車を移動させてはライトを右に左に投げて、憑かれたように赤い眼を探すのだろうか。その眼から更に前に進む力を得ようとして。

列車は松本駅に到着し、かなりの客が乗り込んできた。スーツ姿の人もいるが、ポストンバッグを持つ親子もいる。

受賞の言葉

神通明美

「赤い眼」が優秀賞に選ばれましたとのこと、非常に嬉しく思います。

作品中の博子は、友人の一人をモデルにしたものです。若いころ苦楽を共にしたことや二人とも俳句をやることから、話の合う部分もあって、会うと歳時記を手には彼女の車でドライブをしたりしていますが、時々、彼女のペースに乗せられ想定外の体験をすることがあります。

そのために帰宅が遅くなり、娘から「不良中年(老年?)」と笑われたりしていますが、この作品は、そうした体験の中から生まれました。

その意味では彼女に感謝しなければならぬと思っています。選考委員の皆様、本当にありがとうございました。これを励みに今後も頑張って書いてまいりたいと思います。

リュックを背負ったカッパルや数人のグループが乗ってきた。足もとを見ると、みな登山靴である。瑞枝は広げていた歳時記と句帳を閉じ、座席を後ろに倒した。目を瞑ると、キャンプファイアを囲んで恋愛や結婚について語ったところが手繰り寄せたい日々として懐かしく思い出された。



銀華文学賞奨励賞受賞

人は法の裁きによって冷厳にのみ処理されるものなのか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫びをあげる。その生身の声がここにある。裁かれる人間——その姿に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集



神通明美

じんづう あけみ

- 本名 西嶋明美
- 1941 富山市に生まれる
- 61 から 2002 まで裁判所に勤務
- 99 「秋微雨」でとやま文学賞を受賞
- 2008 「雪解靄」で銀華文学賞奨励賞を受賞
- 11 「引渡し」で銀華文学賞奨励賞を受賞
- 12 「蕎麦の花」で銀華文学賞優秀賞を受賞
- 12 小説集「雪解靄」(アジア文化社) 出版

「かいむ」「青嵐」(富山市)「讃岐文学」などの同人誌に作品を発表
現在、文芸誌「ペン」(富山市) 同人

父の理想郷

来の宮あんず

大黒屋のスガキさん、理想郷にいるそうよ。

暮れかかったカゴバ橋の袂での老いた女たちの立ち話が、かたわらを通り過ぎようとする買物婦りのわたしの耳に偶然入った。——大黒屋。父に違いない。屋号の大黒屋は江戸時代の旅籠屋の頃から続く父の生家で、父はその十代目、黒川清城『スガキ』だ。狭い町の中で土着の父を知らない年配者はいないだろう。長い間塊となつて胸の奥に痞えていた父が理想郷にいる。——理想郷。俗世間を離れた安楽な地。苦しみがなくて暮らせる土地、楽土。想像し得る限りでの最上の住みよい土地。そのようなところが現実存在するかどうかかわからないが、想像し得る限りでの最上の土地、とあれば、なくはないだろう。麻の背広にパ

ナマの帽子を被り、普段と変わらない様子で家を出て行った父の後ろ姿がまぶたに映る。その姿はわたしの目に妙に寂しげに映り、父はもう帰ってこない、と直感させ、心の奥で父を呼び、涙に掻き暮れた。十歳を迎えたばかりのわたしが玄関脇の松の木の陰から最後に見た父の姿だ。四十を半ばにして今、その後ろ姿に目頭を熱くする。年月を隔て知る人も少ない父の、なぜ今、巷での噂か。思わぬ事故あるいは災難に見舞われ、俄に世人の知るところに至ったのではあるまいか。父のいる理想郷はどこにあるのか。橋を渡り、私鉄の踏み切りを越え、その先のわが家へ向かう。パンのケースを通して店の奥を見る。眼鏡を鼻に落とした七十過ぎの母が居間のテーブルを前に帳簿を付けている。

父が家から姿を消したその頃、母が開いた土地の人相手の食料品店で、わが家の経済を潤すには充分なほどの捌けがある。母は自分の仕事の褒美でもあるかのように、あるいは父を忘れようとしているかのようにもあり、突然海の向こうへの旅を趣味とした。わたしは店の奥へ進み、母の前に座った。お帰り。仕事なかばの母が帳簿から目を離さず声を掛ける。わたしはペンを走らせる母の手許を黙って見詰める。見詰める母の手元に薄暮の中での父の噂話をする女たちの姿がちらつく。母は父が理想郷にいることを知っているだろうか。噂を耳にしただろうか。それを母に尋ねる勇気はない。母は父については触れたがらない。父が家を空け始めた頃、まだ幼かったわたしは、父が家を空ける理由を母に尋ねた。どうして帰って来なくなったの？ ずっと帰ってきていたのに。だから遊んでもらえた。バスで幼稚園にもいかれた。お父さんはどこにいるの？ ねえどこにいるの？ 何もいわない母にわたしは執拗に迫った。父は毎朝国府津駅のすぐ近くにある勤め先の運送会社までのおよそ十キロを、家の前からバスで行く。わたしもそのバスで父の勤め先に近い幼稚園へ行く。昼頃になると小田原名物の駅弁、わたしの大好きな鯛めしを父が届けてよこす。竹輪、蒲鉾、貝の佃煮、梅干などの副食物の付いたお弁当のそのお菜より、鯛のおぼろが一面に載せてある味付けご飯のほうわたしは好きなのだ。幼稚園の授業が終わ

ると父はわたしを自分の仕事机のそばで時間まで遊ばせておく。帰りは父と一緒にバスで家に帰る。父は窓の外へ指を差し、あれが曾我の梅林だ。鯛めしのおかずの中に小梅が一粒入っていただろう。ここで収穫された梅だ。ここは梅の名所だからな。あそこに二本並んだ鉄道線路が見えるだろう。あれは御殿場線だ。汽車が煙を吐いて走っていた。まるで命を吹き込まれた元気な少年を見ているようだった。今は味気ないディーゼルだけだな、などと説明する。わたしはそんな説明より鯛めしを食べることのほうが忙しい。家に帰って食べる夕食用の鯛めしを父と一緒にバスの中で食べてしまう。父の話は上の空だ。聞いているか？ 父がわたしの額を小突く。わたしは父とのふざけながらのバス通いが楽しくて堪らない。その父が家に帰って来なくなった。一緒にバスで通いたいのにそれができない。なぜ帰らないのか。会社の仕事が終わって家に帰って来ない父はどこへ帰っていくのか。母に尋ねても母は何もいわない。わたしは会社にいる父に会うこととして国府津行きバスに飛び乗った。父を連れて帰るのだ。連れて帰れば二人で一緒にバス通いができる。バスが国府津駅に向かって走った。終点で降り、父の勤め先の会社の前に立つ。窓の間から父の席を覗く。いない。ドアを開けて中に入る。お父さんはどこにいるの？ 顔見知りの社員に尋ねた。もうここへは来ていないということだった。父は会社を辞めて

いた。お父さんはもうここへは来ないの？ ねえ、来ないの？ 社員は黙って頷き、わたしの手に菓子握らせ、わたしをバス停まで送り、始発間際のバスに乗せた。泣きながら窓の外を見ているうちにいつの間にかバスは家の前に着いていた。バス停で母がわたしを待っていた。抱きかかえようと母を振り切つて一散に走つた。踏み切りを越え、カゴバ橋を渡り、町の中心へ向かつて走る。三本に分かれた道の起点で一瞬立ち止まる。どの道を行つても汽車が煙を吐いて走っていた御殿場線の駅に出る。わたしは上の道とも下の道とも雰囲気の違いの音色が聞こえてくる。道の道を行くことにした。通つてはいけないと母が叱る道だ。菓子屋の前を走り抜け、庭の手入れの行き届いた置屋を斜めに見てひた走る。写真屋を過ぎ、映画館を過ぎ、小料理屋を過ぎ、三本の道が一緒になるところで御殿場線の駅をかたわらに、厭というほど、のめる。膝が擦り剥けた。血の滲む膝を手で押さえ、上を向いて、お父さん、と叫んだ。立ち上がつて、今度は下の道を帰路に向かう。途中の私鉄の駅まで一気に走る。カゴバ橋を渡り、母と二人で見た小田原の花火をまぶたにちらつかせ、踏み切り手前で立ち止まる。私鉄の駅を出た電車がカーブの鉄橋を渡り騒音を轟かせて入ってきたのだ。巻き込まれるのではないかと恐怖に襲われる。鉄橋を渡る騒音に誘われてか、電車に飛び込む人の出る恐ろしい魔の踏み切りだ。そこを越え

で電灯を点け、本棚の地名大辞典の分厚い総覧のページを繰っている。

りそうきょう。丹念に見ていく。ない。何度も見る。見当たらない。市町村名事典を見る。市にも町にも村にも理想郷という地名はない。地名大百科を見る。ない。俗世間を離れた安楽な地など初めからないのだ。夜の薄い光を受けてこれまで見えていた山が空に溶け込んで見えなくなっている。あの山には忘れられない父との思い出がある。父が一月に一度か二度、家に帰つて来ていたわたしの子供の頃、父はわたしを連れて標高五百メートルほどのその山に登った。父は頂上にさつま芋を作ったのだ。父にとつてはさつま芋などどうでもよかった。娘と山へ登りたいだけのことだったのだ。ある日わが家へ小形の馬がやって来た。耳も大きくなく尾の先端に長い毛の房もないことからロバとは違う北海道にいる馬であると父がいった。父は、わたしの手を取つて馬の体に触れさせた。馬は目を細めた。頂上まで辿り着けない娘のために父は小形の馬を用意したのだ。わたしはその可愛らしい目をした馬に、メメ、と名付けた。メメの背に鞍を置き、その上にわたしが載る。わたしは駱駝の鞍に乗った砂漠をいくお姫様になる。父は弁当や水をメメの体に括り付ける。これで頂上までいけるぞ。父は満足そうだった。メメの背に載っているわたしの横を父が歩く。父がわたしを見てにこりとする。わたしに

たところで母がわたしを待っていた。瞬間涙が溢れた。橋の上からお父さんと二人でまた花火を見よう……。大声で泣きながら僅かな距離の家までを、母に縋つて歩いた。

母は父に女のいることを知っていた。岡山県出身の中の道の置屋が抱える芸者、ノリコ、であることを。狭い町の中を吹く風が母に教えずにはいなかった。わたしはそれを後に母から聞いた。父はノリコの全借金を払つて、自分の女にしたノリコを連れて、彼女のふるさと、岡山へ行き、その後、こちらに舞戻つて、岡山から取り寄せた畳表で旅館相手の商売を始めた。ノリコが芸者として再び客の前に出ることはなかった。しかしそれは父の帰宅が途絶えたばかりの頃のこと、母が今、代々続いた家の資産のほとんどを処分し蜜柑山と母子の住む家だけを残して出ていった父に付いて、どれほどのことを知っているか、わたしには些かもわからない。巷の理想郷という土地がどこにあるのか……。今更父を探してどうなるものでもない。捨てて出ていった妻子を父が覚えているとは思えない。探すことはない。突然耳を襲つた噂話など吹き飛ばしてしまえばよい。しかし居所が大筋で分かってみると、何一つ自由のない家に生まれ育ち、妻子に囲まれ、これ以上ない幸せの中にながら何が不足で家を出ていったのか。来し方の父を知りたくもあり、子供の頃のわたしを可愛がった父に会つてみたくもあり、すでに暗くなっている部屋の中

歌が出る。月の砂漠をはるばると……。お父さん、王子様とお姫様を乗せた駱駝はどこへ行くと思う？ どこだろうな。砂丘を越えて行くのよ。どこへ行くんだ。そこまではかわからない……。そうか。頂上はすぐ先だった。山のさつま芋は蔓を伸ばして、力いっぱい引くと、ごろごろと大きなさつま芋が出てきた。お父さん、今日はここでおしまいよ、明日はあそこまで掘るのよ。あさつてはあそこ……。三日もすれば家を出ていってしまう父を引き止めておきたくて、日を延ばす。父は頂上からの眺めに、あれが相模湾だ。鯛めしの小田原はあの辺りかな。川音川はあそこだ、水が光っているだろう。うちの農園はどこかな。父は蜜柑山のことをいかにも楽しそうに農園という。御殿場線の駅は見えないな。あの汽車はよかったなあ、といった。わたしは父とバス通いをした国府津の辺りを黙って探していた。あの時父は会社にはいなかった。何日かして父が家に帰つてきた時、着替えをしようとしている父に、お父さんは会社にいなかった。いなかったのよ、と攻めた。嗚咽を堪えて国府津の辺りを見ていると、父が、この辺りは海があつて、山があつて、素晴らしいところだ。温泉が湧き出るとなおいんだがな、といってわたしを見た。わたしは思い切り元気な声を出していった。掘れば出るわよ。近くに湧き出たところがあるもの。ここはいいところよ。どこよりもいいところよ。だからどこへもいかないで……。

それからわたしは大きな声で、お父さんはどの温泉が好き、と叫ぶようにしていった。父は、伊豆かな、伊豆は暖かいし気候がいい……。わたしは箱根よ。箱根が大好きよ。幼い時の父と母との三人で黄色い硫黄の温泉に入ったことが忘れられないでいる。そうか箱根か。箱根は寒くて厭だよ。伊豆は暖かいし周囲が海というのがいいね。なみなみとした水が見えるというのはいいものだよ。父は温泉が湧き出ている、海の見える伊豆がどこよりも好きなようであった。お父さん、坂の向こう側には何があると思う？ 父といつまでも話をしていたくて、胸の中で眠っていたことが突然滑り出した。幼い頃、見えない登り坂の向こう側には別世界があると信じていた。働き者の女性と幼い娘の住む輝く城があつて、城の周辺のたわわに実る果物の甘い香りの中で女性は働き、娘は遊び戯れる。坂の向こう側は、絵に描いたような美しい城があると信じていた。ねえ、何があると思う？ 見えない坂の向こう側か、理想郷だ。理想郷？ 父は理想郷の地図を指で宙に描いた。池や沼などにある体の不定形なアメーバのようなその地図は、形を残すまでもなく宙に留まらない。見えない見えないと騒ぐわたしを父は、困らせて喜ぶ悪い娘だ、といいながらも嬉しそうに目を細め、何度でも宙にアメーバを描いた。メメが立ったままじっとしている。父が帰ると同時にメメもいなくなる。どこから来てどこへ行くのか。どこから来てどこ

へ帰っていくのか。メメと父とが重なり合つて胸が塞ぐ。外はすっかり暗くなつていた。ほとんど真つ暗だ。——あの時父が宙に描いた理想郷の地図、体の不定形なアメーバ。あれは暖かくて好きだといった伊豆半島だったのだ。そう、父は伊豆にいたのだ。思い当たる節がある。父に連れられて小田原の、だるま、という食堂へいったことがある。メメをうちへ置いてほしいと無理を通そうとするわたしを父が宥めてのことだった。そこには父の友人たちがテーブルを囲んでいた。彼らから挨拶交わりの声が父に掛かる。今日は近海物のいいのがありますよ。例の娘さんですね、などと。この前八幡野へ磯釣りに行ってきましたよ。石鯛には見放されましたがね。一碧湖の辺りも見えました。山の中で何もないと置きましたよ。あの辺りはこれからですね。今のうちに買って置くといひですよ、広い土地を。あそこは俗世間から遠ざかつた理想的な楽土ですから。そうだね、一碧湖辺りかな。理想の地は。早速下見に行つてくるか。父は伊豆の一碧湖辺りを買おうとしていたのだ。わたしと母はそれを知らない。父の友人たちだけが知っている。父には秘密厳守の友人がいると思つた。父のその友人たちがわたしには意地悪で厭な人に見えた。そんな父を冷たい目で見ていた記憶が鮮明に甦る。父は伊豆にいるのだ。一碧湖近くのなみなみとした水の見える家に……。地名大辞典にも地名大百科にも市町村名事典にも理想郷とい

う地名はなかった。インターネットに繋いでみる。「理想郷 地名」で検索する。想像上に描かれた理想的な……。辿り着けない架空の……。夢は所詮叶わないからこその……。遙か遠い……。どこにもない国を意味して理想郷の説明が連鎖する。希望を繋いで次へ次へとページを送る。無税政治と……。おや。鶴原理想郷。理想郷は理想郷でも頭に鶴原が付く。南房総の観光名所、千葉県勝浦市……。観光地だ。父のいる理想郷が鶴原理想郷とすれば、スガキさんは鶴原理想郷にいるそうよ、となりそうなものだ。続けて検索する。「鶴原理想郷 所番地」ない。「勝浦鶴原理想郷 所番地」別荘地として開発された際、理想郷の名が付いた。やはり地名ではない。「千葉鶴原理想郷 所番地」ない。これだけ検索しても地名と感じられる文面は出てこない。地名になれば駅名にはあるだろうか。「理想郷 鉄道 駅名」続いて「駅名 理想郷」「日本全国駅名一覧」「日本鉄道駅一覧」や「わ行。ようやく一覧がでた。ら行の、息を詰めて見ていく。陸前……。陸中……。竜王……。理想郷はない。スガキさんは理想郷にいるそうよ、というのだから、理想郷はどこかにはあるはずだ。残るはバス停か。バスには父との思い出がある。せめてバス停にあつてほしい。「日本全国バス停一覧」温泉地の場所……。旅館への案内……。日本全国の珍名スポット……。難読バス停……。温泉地への案内のようだ。理想郷などというところはどこ

にもないのだ。夢は所詮叶わないからこその想像上の世界。そんな世界がこの俗世間にあるはずはない。あるとは思えないところにいる父を愚かにも探している。地名や鉄道の駅名ばかりでなくバス停に至つてまでどうも出ないというの、ありもしないところを探するのは止めたほうがよいという示唆に思えてくる。しかしここまで来ては後に引けない。再びページを送る。おや、バス停一覧が出た。しかし、ら行の理想郷はここにもない。他のページを見る。別の一覧が出た。理想郷・湯河原温泉バス停案内・路線バス時刻表。——湯河原温泉？ 理想郷？ 路線バス時刻表。あつた。あつたのだ。理想郷はあつた。湯河原に理想郷というバス停がある。理想郷はあつたのだ。路線バス時刻表を見る。湯河原駅から奥湯河原入口へ向かう途中に、理想郷というバス停がある。おや。別の土地の、理想郷東口、という文字が目に入る。東口というのだから表玄関があるはずだ。伊豆高原駅から一碧湖方面に向かう途中の、理想郷東口からやや離れた場所に、表玄関の理想郷があつた。一碧湖近くの理想郷。何はともあれ理想郷はあつたのだ。ここまで来ればもう父を探し当てたと同じようなものだ。風光明媚な観光名所の、湯河原の理想郷。伊豆一碧湖近くの理想郷。父は一碧湖近くの理想郷にいたのではないか。父が理想として描いた平和な場所。俗世間を逃れた安楽な地。伊豆の一碧湖近くの理想郷こそが父の描いた理想郷に違

ない。伊豆を好んでいた父は今一碧湖近くの理想郷にいる。

早速伊東駅に降り立った。理想郷はどのようなところか。父はきつとそこにいる。高鳴る胸の鼓動を意識しながら理想郷へのバス停を探す。探したバス停にバスは入っておらず、日に何本も出ていないバスを待つ人もいない。案内所へ行く。シャボテン公園行きバスに乗り、理想郷東口で下車し、そこから徒歩十五分、理想郷に着くと教えられる。間もなく発車するそのバスに乗った。バスが走り出して街の中の緩やかな坂を登り切った辺りに、美術館を周囲に持つエメラルドグリーンの一碧湖があった。周囲を人が歩いている。若い人であったり、年配者であったり、子供連れの男女であったり、老夫婦であったりする。父もこのエメラルドグリーンの湖畔を散歩したことがあるだろうか。山の中で何も無いところでしたよ、あの辺りはこれからですね。記憶にある父の友人の言葉がよぎる。今、一碧湖は賑やかな街の中にある。車窓に映った男が麻の背広にパナマの帽子を被った父に見えた。いつまでも消えることのないわたしが最後に見た父の姿だ。父が理想として描いたに違いない平和な場所、理想郷はすぐそこだ。大通りを目の前にして人が住んでいるとも思えないあばら家の前でバスは止まった。数十分を掛けて到着したそこが理想郷東口だった。下車したのはわたし一人で、乗る人はいない。佇んで

辺りを見廻す。民家はどこにあるのか。目の前は山だ。これが理想郷か。しばらくの間立ったままでいた。やがてわたしは大通りを、もう一つのバス停、表玄関の理想郷に向かって歩き出す。通りに面して、バスタ、ペーカリー、お食事処などのしゃれた店が木や草の繁みを挟んで点々とある。店はどこも静かだ。大室高原不動産売買、売り物件、温泉付き別荘地売り出し中、などの派手な看板が目につく。ここは大室という高原か。ここまで来てようやく高原の別荘地を意識する。人に出会わない。人恋しくなるほど出会わない。車は頻繁に通る。大通りを折れた小道の両側に別荘らしいモダンな造りの住宅が点在する。尖った屋根の教会のような建物であったり、積み木を重ねたような四角っぽい家であったりする。父はどのような住宅を好むのか。山へ登る年端もいかなない娘のために馬を準備するなど父の着想は奇抜だ。創意工夫を凝らした独創性に富む住宅であろう。逸る心を抑え、表玄関の理想郷へ向かう。

日の高い大通りを微風に靡くすすきの花穂に手を触れ、小道への角の、○家へはここに入る、などという矢印の表示板を横に見て、もしや父の住まいがこの辺りにありはしないかと物色しながら歩いていくうちに、伊豆ガラスと工芸美術館、商品の中には女性の衣服も目に付くみやげ物屋、などのある交差点に出た。そこが、目指す、表玄関の、理想郷のバス停のあるところだった。東口に比べて店や美

術館があるなど、華やかさがある。父は多分この辺りにいるのではないか。スガキさんは理想郷にいるそうよ。脳裏に入力されたあの言葉は決して消え失せることなく、時折出てきて、早く父を探し出せとばかりに煽り立てる。わたしは理想郷の周辺を隈なく見ていくことにした。そう決めると忽ち空腹が襲ってきて手提げ袋の中の小田原駅で求めた鯛めしが目の前にちらつき、道端の草叢の中の切り石に腰を下ろした。

八角形の折り箱の、蓋に描かれた、鯛めし、の赤い文字のかたわらで、真つ赤な鯛が波の上で跳ねている。お、鯛。

あの時のまま、少しも変わっていない。この蓋の、跳ねている真つ赤な鯛が好きだ。掌の上の折り箱がしつとりとすまがが掌にある。蓋を外して脇に置き、おぼろの載った味付けご飯に視線を注ぐ。ご飯を口に運ぶ途中、箸の間からおぼろがこぼれる。今箸のほかに木の薄いスプーンが付いている。掬って口に運ぶ。この味だ。しつとりとした甘めのおぼろ。舌が憶えているこの味。父と一緒にバスの中でおぼろを膝の上にぼろぼろとこぼした。そのおぼろを父はせつせと拾った。今、おぼろはスプーンに掬われて、こぼれない。かたわらの蓋の、真つ赤な鯛が跳ねている。あの時の真つ赤な鯛。いや、あの時の真つ赤な金魚も跳ねた。夏祭りの、金魚掬いの金魚だ。勢いよく跳ねて水

に落ちた。掬い損なつたわたしを父が、下手だなあ、といつて笑った。挑戦した父も失敗した。何度も失敗した。わたしは飛び上がって手を叩いて喜んだ。喜ぶ奴があるか。父はわたしを手で払おうとした。わたしは逃げた。風船が道の上に飛んでいた。走つていつて手を伸ばした。届かない。そばで男の子が泣いている。通りの裏へ行って、竹の棒を探してきた。風船から下がっている紐に竹の先を絡ませるのだが、絡まない。父が変わった。風船は無事男の子の手に渡った。父がわたしの頭を撫でた。嬉しそうな顔をしていた。あの時の父は今、この俗世間を離れた大室高原の一郭にいる。

父を探す手掛かりが掴めればと、みやげ物屋に入る。都会的センスの光る衣服を横に見て小袋の菓子に目をやる。女店員が笑みを浮かべて近付いてきた。遠くからですか？軽く頷く。彼女はこの辺りの案内をし始めた。少し前まで海がきらきら光つていてもきれいでした。輝く青い海を見せたかったといいたげな顔で彼女はわたしを一瞥し、窓の外へ視線を移した。ここは海に近くて人気のある場所です。大室高原といって元は富戸という地名だったので。理想郷という地名はないのです。最近別荘としてではなく、定住を目的に越して来られる方が増えているようです。——定住。ところで大室高原の大室というのは何ですか？彼女によると、噴火で出来た標高五八一メートルの円錐形

の山の名のことだった。わたしがああの時、ロバではないかと思つたポニーという小形の馬、メメの背に載つて登つた山もほぼ同じ高さの山だ。父はその大室山に登つてゐるだろうか。メメを思い出して登つただろうか……。大室山は草山です。木は一本も生えておりません。山焼きをするので木は生えないのです。頂上には噴火口があります。そこへ行くにはリフトで上がるのです。歩いては行けません。行つてはいけません。——草山。木の生えていないすり鉢を伏せたような形の山……。登つてみてはいかがですか？ 契められても登る気になれない。木に覆われた山であれば勇んで登るだろう。リフトでは父やメメの面影は浮かんでこない。わたしは窓の外の、生い茂る木の間から遠くを透かして見、その山はどこにあるのかと尋ねた。理想郷東口のすぐ先です、という返事だった。あああの辺りかと東口で下車したわたしは納得する。一碧湖は大室山の噴火で生まれた瓢箪型の湖です。周囲が四キロですから、一周する人が多いのです。美しい湖の周囲を歩いてみてはいかがですか。女店員の案内に、時間があればそうしてみようと思ひながら店を出た。

大通りを折れ、小道を行つたところで突然青い海が開けた。なみなみとした水が漣を立てている。父が理想として描いたに違ひない平和な場所。俗世間を離れた安楽な地。まさに父の好む理想郷だ。父はこの辺りにいるに違ひない。

各家の門に掲げてある表札を片っ端から見に行くことで、黒川清城の文字を見付け出すことができるのではない。個人的な住宅には注意深く表札を見る。そこが海の見える家であることを念頭に置いて……。小道から小道へと歩を進める。林の中の住宅に迷い込んだ。赤や黄色のコスモスが暗くなりがちな庭を明るくしている。この家からは海が見えない。大きな屋敷の前に出た。閉ざされた鉄扉の向こう側に和風庭園がある。人の気配がまったく見えない。そこからも海は見えない。伸び上がった透かしても見えない。高原の理想郷というだけの海の見えない場所に父は住まいを作らないだろう。父の望む理想郷は温泉が湧き出でて、なみなみとした水の見えるところだ。屋敷内から海が臨めるといふのは決して多くない。大通りへ戻つて反対側の小道へ入る。どこまで続くかわからない小道の両側の表札を見て歩く。水が見えるとは思えない住宅の並ぶ辺りを過ぎ、視界に海の開ける地形を求めて小道を辿る。どの家の表札にも黒川清城の名はない。父は一体どこにいるのか。再び大通りに戻り、別の小道に入る。辺りを見廻しながら歩いていくうちに、人の気配を感じるちんまりとした住宅の前に出た。前庭を隔てた玄關脇の部屋の窓に薄い人の影が映っている。年配者ではないかと思われる鈍い動きの影。もしや父……。いや、ちよつと違う。どこかが違う。そんな気がする。わたしは老いた父を知らない。影は窓を開けて

外へ顔を出す様子はない。ふと、隣家を見たわたしの目が据わつた。枯れた茅に覆われた広い庭。学校の運動場とも思えなくもない広さの庭。住宅の脇を飾る枯死寸前の一本の大木。反りのある切妻屋根。純白だったに違ひなくすんだ外壁。そこに並ぶ西洋風ともいえる縦型の窓。日本の伝統的建築に違ひはなさそうだがモダンである。華やかではあるが決して派手ではない。いつ建てられたものなのか。古い。この家に人の住んでいる様子はない。この空き家からは父が喜びそうななみなみとした水が見える。輝く海が見えても人の住んでいない荒れ果てた空き家に父がいるはずはない。表札もない。佇んで荒れた庭の向こうに見える海を眺める。父もその昔、佇んでは理想郷を探したのであるか。父の理想郷はどこにあるのか。この高原の人氣のあるところか。この辺り一帯になければ、どこにあるのか。もう探すところはない。父の理想郷はこの高原にはないのか。しばらくの間海を眺める。湯河原だ。伊豆の入口の湯河原。父の理想郷は暖かい湯河原だ。そう決めると気が急いだ。一刻も速く湯河原へ行かなければならない。暗くなり始めた大室高原の大通りを宿に向かって引き摺る重い足に鞭を打つ。

始発のバスも通らない早朝、湯河原のバス停、理想郷に立つ。なみなみとした水の見える父の理想郷はどこにあるのか。バス通りを挟んだ両側の、高さも形もほとんど変わ

らない山を見比べる。一方の山へは川に架かった橋を渡り、もう一方の山へは通りから入る狭い坂道を行く。水嵩の多い流れの速い水音が聞こえている。インターネットに接続した時のパソコンの画面に映っていた地図上の橋がよぎる。父の理想郷はその川に架かった橋を渡った先か。それとも、通りから入る狭い坂道を登った先か。その狭い坂道の登り口に理想郷の案内板が出ていた。近寄つて行つて、正面に立つ。そこには著名人の邸宅、官公庁の保養施設だけが掲示されている地図が設けられている。理想郷は湯河原が誇る特別な場所だった。その風光明媚な湯河原が誇る理想郷へ、そして同じように風光明媚なその付近へと、父の理想郷を求めて登り始めた。僅かに登つたところで商店街の騒がしさも温泉地特有の猥雑さも消え、しつとりとした山の空気に包まれた。敷地の広い立派な邸宅の表札を見ては辺りに海を探す。曲がりくねった細い坂道の途中に、交番があった。こんなところに交番が。小田原警察署理想郷立寄所、としてある。——立寄所。町の要所に設けられた警察官の詰所である交番とは違つて、理想郷立寄所だ。著名人の邸宅のあるこの特別な一角を警察官が立ち寄るなどして守つていくということか。立寄所の中に人はいない。建物には錆が見える。小道に入り、海を探す。この特別な一角のどこからも海は見えない。見えないそんなところに父は理想郷を求めない。坂を登る。いつの間にかマンションや

一戸建て住宅などのある見慣れた風景に変わっている。湯河原が誇る特別な場所にも優るとも劣らない風光明媚な陽をいっぱいを受けた庭で、車を洗う人や庭の草取りをしている人の姿を見掛ける。さらに坂を登る。蜜柑山に出た。粒の揃った大きな蜜柑が温かい斜面で色付いている。一つ、失敬する。石の上に腰を掛け、皮を剥く。いい匂いが顔の廻りを取り巻いた。子袋を口に含む。すっぱい。おおすっぱい。湯河原が誇る理想郷の蜜柑より、うちの山の蜜柑のほうがずっと甘い。父はどこにいいのか。この先になみなみとした水の見える場所があるとは思えない。向かいの山が青々としている。水嵩の多い流れの速い水音が耳の奥で聞こえる。父の理想郷は水音の聞こえる閑静な川の向こう側だ。そこにはなみなみとした水があるに違いない。急ぎ、坂道を下る。

バス通りを向こう側へ渡り、行き交う車でいっぱいになって狭い橋を手摺りに身を委ねるようにして通り過ぎ、対向車に恐怖を感じながらビルの間のくねくねした坂を登る。突き当たって広い道に出た。道の両側は坂に沿って旅館や高い建物が並んでいる。閑静というにはほど遠く、高層ビルでぎっしりだ。海の見えそうな父の理想郷を目指して広い道を行く。父の理想郷はこの山の向こう側か。それとも中腹か。不思議なほど人が通らない。後から来る人もいない。どうということか。この先に人家がないということか。

った。何がどうなつたのかかわからなかった。その夜だけ、ほかの夜はどうなつたのか、その夜だけ、たまに帰ってくる父がどうして玄関の戸を激しく叩いたのか……。ああ、頭が混乱する。お父さんが悪い。どう考えてもお父さんが悪い。夜中わたしに目を覚まさせたお父さんが悪い。呪文のように唱えながら父鼠肩のわたしが父を非難した。父が大好きなのに、その晩の父は大嫌いだ。父は威張っていた。何をしようと、家にいようと、この家の主であった。人には優しいのに母には優しい顔を見せない。見せたくても、心が咎めて、見せられないのではない。恋の相手でない母と向き合っているのが苦痛でたまらないのだ。それで母に当たり散らす。それでも母は、いつ帰るかかわらない父のために無用心と思いつつも玄関の戸に鍵を掛けずにおく。父はわがままだと思った。本当はいい人なのに。父は人に好かれる性分のように、帰ってくる近所の人たちが集まってくる。農園の手入れに行くんだよ、などと蜜柑山を見回りに行くのを止めて替打ちを始め。父は厭とはいえない優しい人であるのに、母には……。父が家を出ていったあと残された母子に世間は非難を浴びせた。主を追い出した恐ろしい母子であると。負けてなるものかと歯を食い縛った。胸の深いところに父への恨み、世間の冷たい風の絡み合った硬い塊ができた。歯を食い縛るたびに塊は大きくなった。橋の袂での女たちの立ち話を

そんなところに海の見える父の理想郷があるだろうか。向かいの山には湯河原が誇る理想郷があった。父の理想郷はなかった。心頼みは残るこの山のみだ。この坂をどこまで行けばなみなみとした水の見える父の理想郷に辿り着けるか。引きも切らず車が走る。流れる車に胸の中で問い掛ける。この坂の上には何があったか。なみなみとした水があったか。海を臨める場所があったか。車は頼りなく通り過ぎる。狭い小道の奥に寺があった。立ち止まって伽藍を見てもなく見る。スガキさんは理想郷にいるそうよ。繰り返して甦る女たちの声がわたしを奮い立たせ、登り坂に向かわせる。両側は木や草ばかりの広い山の道。その道をどこまでも行く。この先に父の理想郷があるとは思えない道を。足を引き摺りながら。切れる息に肩を震わせて。一体わたしはこの坂を登ってどこへ行こうとしているのだ。この先に理想郷があると思うか。あるとは思えない道をなぞ登る。家族を捨てて出ていった父をなぞ探す。母は借金をして店を出し、娘との暮らしを立てた。豪奢な生活も邸宅も望むままの父に路頭に迷う母子の暮らしがどのようなものであったか知るまい。母は一言の愚痴も漏らさず、早朝から夜遅くまで店と取り組んだ。山の蜜柑の手入れは手伝ってくれる人に任せた。父が遅く帰ってきたある晩がよぎる。玄関の戸を激しく叩く音で目を覚ました。その夜押入れの中で父の声による地獄を味わった。母の声は聞こえてこなか

耳にした瞬間父が生きていることを心の底で否定した。今頃になって理想郷にいるなどと人づてに居所を知らせてきたりして、父は卑怯だ。そんな父を探すことはない。足許の石ころを蹴る。思い切り、蹴る。石ころは遠くへ飛ばない。拾い上げて道の先へ投げる。飛ばない。蹴る。わたしはこんなところで何をしているのだ。父の理想郷があるとも思えないこんなところで。わたしは、わたしと母を路頭に迷わせた父を探しているのだろうか。そのような父を探しているのではない。ノリコに走った父を探しているのでもない。子供のわたしを可愛がった思い出の中の本当の父を探している。バスの中でわたしがこぼした膝の上の鯛めしを拾った父。山へ登るわたしのために馬を用意した父。金魚掬いを一緒にした父。わたしの知っている本当の父を。そしてどうあろうと掛け替えのない父親だから……。道端の草の上に倒れ込む。精も根も尽き果てた。目を閉じる。極限状況の中で父の幻を見る。父は死んでいる。山の向こうで死んでいる。父の理想郷で生きている。本当の父は生きている。自分を取り戻した時わたしは大室高原へ向かう陽の落ちたタクシーの中にいた。

窓に映っていた背の丸い影にもしや父ではないかと胸を弾ませた住宅の前でタクシーは止まった。前庭を隔てた玄関脇の部屋の窓は雨戸で閉ざされ、一筋の光も漏れていない。夜の光の中で遠慮がちにブザーを押す。インターフォ

ンを通して用件を伝える。白髪の老女が門扉を開けに来、わたしを玄関ドアの前まで案内した。窓に映っていた薄い影が父であるとすれば、白髪の老女は、ノリコか。わたしはノリコを知らない。少しだけ開いたドアの内側で、セーター姿の主と思われる老人がわたしに声を掛けた。お父さんを探しておられるとか。わたしは老人の面輪に父を探す。しかし老人に父の面影はない。老人は父ではなかった。わたしは尋ねた。この辺りの住宅の表札を見て廻ったが父の名はなかった。黒川スガキの名に憶えはないだろうか。老人は頸を傾げ、考えていたようだがやがてわたしを家の中に入れ、三和土にいるわたしに再度同じことを聞いた。黒川スガキね。老人はその名前の男を知らなかった。やがてわたしは応接間へ通された。通された応接間の白い壁の、画鋏で留められた茶に変色した厚紙の鯛がわたしの目を捉えた。——鯛めしの鯛。父との思い出の多い鯛めし。この老夫婦も鯛めしが好きなのか。華やかな包装のしかもうまそうな弁当が目を引く中で、地味な存在を保ち続ける昔ながらの小田原の駅弁、鯛めしが……。その鯛めしの折箱の蓋の、色こそ褪せてはいるが赤い鯛がここにある。壁に飾られて。俄かに父の姿が目に入った。幼稚園で鯛めしの包装を解いた時、真っ赤な鯛の上に短い手紙が置いてあった。たくさん食べて大きくなれよ。父は待っているからな。嬉しいはずの手紙がなぜか寂しかった。老人が壁の鯛を見て

いるわたしに気付き、今は空き家になっている隣からの妻への土産でして、といい、黒川スガキという名は聞いたことないね、隣は金森だし、その隣は何ていったかな、と突然話を替えて顔を擧げた。わたしは老人に、父は七十を疾うに過ぎていて、家を出てから三十数年が経っている。とくに海の見える場所を好んでいたと伝えた。すると老人は、自分たちがここへ来て十年は経っているが黒川スガキという名は聞いたことない、といった。

老女が茶菓子を運んで来た。以前隣のユウから教わったというチョコレートケーキに紅茶が添えられている。——隣のユウ。金森ユウ。鯛めしの蓋の赤い鯛が父を偲ばせるものであってみても、名が、金森であるということは父でないことに違いはない。わたしは老夫婦にいとまを告げ、宿へ向かうことにして席を立った。老人がわたしを引き止めた。丁度食事をするところだったので一緒にどうかと。妻もユウさんがいなくなつてからは寂しがっている。積もる話もあるだろうから聞いてやつてくれ、ということだった。瞬間わたしは思った。鯛めしの赤い鯛。どこか縁のありそうな今はいないというユウ。老夫婦が発する言葉の一言半句をゆるがせにすることなく、窓に映った薄い影にもしや父ではないかと一瞬心に留めたのも縁であればこそ、そこからたとえ僅かでも父の消息が掴めればと、いや掴んで先へ進む手掛かりにしようと、再びソファアに座した。

夕食の、ユウが好んでいたという殻付き牡蠣が運ばれてきた。放射状に並べられた氷の上の牡蠣。老女が他の料理を運んで来ては一言二言ユウの話をする。ユウの夫は、ユウに家を建てた。隣の家はユウが主の、ユウの家……。わたしは老女に尋ねた。表札は金森ユウだったのですか。黒川スガキではなくて……。老女の返事は、金森、だった。そういうえば黒川だったかしらねユウさんの旦那さんの苗字は。老女は老人に問い掛けた。老人からの返事はない。それにしてもスガキというのは珍しい名で、初耳ですから、ユウさんの旦那さんが黒川だったとしても、あなたのお父さんではなくて、別の人もかもしれませんわね。わたしは老女に、スガキとは清城という字を書きます、といった。何を思ったのか老女は突然席を立った。しばらくして名簿のようなものをして戻ってきた。ありましたよ。黒川清城。ユウさんの旦那さんの名前はやはり黒川でしたよ。存在感がなくて、近所付き合ひもまったくなかったから、姿もですけど、名前を知っている人はいないんじゃないんですかねえ。すべて金森で通っていましたし……。奪い取るようにしてわたしは老女の持つ地域名簿らしきものを手にし、黒川清城と登録された名を穴の開くほど見た。父です。確かに父です。父はここにいたのですね、父は……。存在感がなかったという父。近所付き合ひもまったくなかったという父。父は人に好かれるはずの人だった。人が集まっ

てくる人だった。厭とはいえない人で、蜜柑山の手入れにいくのをやめてまで人と碁を打つような人だった。しかしここでの父はまるで違う。人を避けるかのように引き籠もっている。隣の住人さえ父の名前を知らない。存在感がなくて近所付き合ひのない父。これが理想郷という夢を求めてやってきたここでの父の姿か。すべて金森で通っていたとは情けない。黒川清城という名は金森の名に隠れてしまつてあつてなかつたようなものなのか。父は家も妻子も捨てた。そしてここへ来た。ここは黒川清城の理想郷に違いないではないか。しかしそこに父の表札はない。実家にいれば大黒屋の十代目、主として堂々と世の中を渡れたものを……。その父は今、どこにいるのか。金森ユウとは誰か。ユウは、ふとしたことからユウの夫が実家に残してきた娘の写真を、本の間から見付けてしまった。それを大事に持っている夫にユウは衝撃を受けた。——実家を忘れられないでいる……。写真が出てきたくらいのことではびくびくすることはないのにとユウは思うのだが、落ち着かなかつた妻と娘のいる家に帰りたいのではないかと思ひながらも、元芸者であつたユウは再び花柳界に舞い戻ることを恐れ、家に帰つたほうがよいとはいえず、悶々とした生活を送っていた。——ユウは中の道の置屋が抱える芸者、ノリコだった。やがてユウは、自分も捨てられるのではないかと密かに思うようになり、精神を病むようになった。そんなユ

—妻子のいる家がどれほど心地よい場所であったか。父は振り返っていた。

わたしは父のすべてを知りたく細大洩らさず教えてほしいと粘り強く老夫婦に喰い下がった。父の写真はないか。普段どのような服装をしていたか。パナマの帽子を被っていないなかったか。麻の背広を着ていなかったか。畳表の商売をしていなかったかなどを……。父の写真はなかった。庭仕事でのジャンパー姿以外は見たこともないというその写真もなかった。父は電話一本で取引のできる旅館相手の畳表の商売を続けていた。ユウが死んで、残されたユウの夫は、仕事の合間に海を見て暮らした。ときには馴染みの馬とも遊んだ。疲れると、雑草の上で馬と一緒に寝転んだ。時には一碧湖の周辺を廻ることもあった。そんなユウの夫を老夫婦は何度となく食事に招いた。ユウの好物だった牡蠣に舌鼓を打ち、何をして何を食べても一人というのは味気ないものですね、などと引き籠もっていた人とは思えないほどさばさばとした明るい口調であった。それはまるで寂しさをひた隠す強がりのようでもあり、弱さを見せまいるとする男の威厳のようでもあった。自分はこれまで表には出ず、裏に廻っていました。それがユウを立てる自分なりの愛情だったのですが、これからは一人の人生をここで楽しもうと思っているのですよ。ここは人生を決めて出てきた理想の地ですから。ユウがいなくなったからとい

ウを、ユウの夫は、ユウの心中を理解することもなく、気分を変えればよくなるのではないかと、湯河原からバスで大観山の猿を見せに連れて行ったり、大室山の頂上へリフトで登って噴火口の周辺を巡ったり、山焼きを見たり、八幡野の磯へ魚釣りにいったり、小田原の高級料理店、だるま食堂へ連れて行ったり、時には乗馬クラブを営む古い友人から馬を借りてきて、一碧湖の周辺を馬と一緒に歩かせたりした。——乗馬クラブを営む古い友人。すると馬の持ち主はあの時の秘密厳守の仲間の一人か。メメはその友人の馬だったのだろうか……。ユウの病気は進行するばかりで治る見込みがなかった。喚き散らしたり暴れ廻ったりするようになり、八年前、通りの車に飛び込んで死んだ。ユウが幸せだったのは、夫の娘の写真を見つけた前の数年間だけであったと……。そして老女は続けた。恋に落ちた仲間とはいえ、いつまでも熱い恋心を保ち続けられるものでもなく、数年もすれば薄らいでしまうのが人情。ユウさんの夫が娘の写真の本の間に忍ばせておいたからといって、それを咎め立てすることもできなければ、またユウさんを咎め立てすることもできない。誰を咎めるといえるものでもありませんよ、二人の仲はどうにもならない運命的なものであったのではないですかね。——駅弁の鯛めしはその頃、ユウの最後の頃、買ったものであったという。ノリコを看取った父は今どこにいるのか……。

ユウを送ってから、気ままな一人暮らしをしていたユウの夫は、一年前、老夫婦に心の底から吐き出すような二言三言を残して死んでいった。——死んだ。死んだのですか。父は死んでいるのですか、一年前に。号泣するわたしの声が老夫婦の部屋に反響する。あんな父死んでしまえばよいと、魔の踏み切りに飛び込んで電車の下敷きになってしまえばよいとさえ思っていたのに、死んだと知らされてどうしてこうも涙が湧き出るのか。父が残したという二言三言とは……。

自分には二人の女がいた。娘を預けてきた実家の妻と、心の支えになっていたユウ。妻は自分の力で行っていくことのできるしっかりした女。ユウは家のために自分から身を投じた花柳界でありながら芸者という商売が身に合わず、怯えているような弱い女。自分は何一つ不満のあるはずのない生まれ育った家や妻子を捨てる罪深さに目を瞑り、黒川清城という名を、そして自分自身を、自分なりにこの世から抹殺して抛っておくことのできないユウに走った。代々続いた家と妻子を捨てるには少なくともそれだけの覚悟が必要だった。時間も必要だった。欲望に歯止めを掛けず突っ走ってきた自分には妻子を苦しめたことも、妻子のいる家がどれほど心地よい場所であったかも見えずに……。唯一つ気掛かりなのは娘のことで、どんな人生を送っているか、一度会いたいが許されることではない。――

我が国には再びない中国北京での
少年の目から見た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋 定價 1300 円 (送料込)

東山昇 著 遠足の頃 千葉日報社刊

注文先 アジア文化社 ※ 御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。
〒 158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

て他の地へ移る気にはなれせんよ、古くからの友人も来ることですし。ユウを看取ることができて、責任の何分の一かは果すことができたと思つてゐるのです。これが反対だったら、といったままユウの夫は言葉が詰まらせた……。妻子のいる家に帰りたいのではないかと察知した老人の、実家の娘に会いにいつてはいかがかという問いに、ユウの夫は、父親としての責任を放棄したまま出て来ていますからその点では胸が痛みますがね、滅多に思い出すことはありませんよ。それでもたまには、あの子の歌つてゐる月の砂漠が聞こえてきましてね。馬に乗つて砂漠のお姫様気分であるあの子が見えるのです。家を後にする自分を松の木の陰から見ている娘の姿がちらついたりするのです。何といても血を分けた娘ですから、まったく思い出さないといいことはできないでしょう。ユウの夫は平然としていつた。

——残してきた娘のことは滅多に思い出さないといつた。しかし娘の歌つてゐる月の砂漠を聞いている。砂漠のお姫様になつてゐる娘を思い出している。松の木の陰から見送つてゐる娘に胸を詰まらせてゐる。何より妻子のいる家がどれほど心地よい場所であつたか振り返つてゐる。父は理想を求めてやつてきたユウとの暮らしの中で往事を偲んでいつた。

わたしは老夫婦に、父が可愛がつていた馬の名前を尋ねた。老人が即座に、メメ、といつた。メメは二頭目だつた。

ウの夫も走る。老夫婦が見るに見かねて声を掛ける。その辺にしておいてはいかがかと……。ユウの夫はその気遣いに頭を下げ、礼をいい、また走る。昼が過ぎ、陽が西に傾いた。ユウの夫はメメをかたわらに、走り、そして歩いた。辺りが暗くなり始めた頃、星明りの庭からメメとユウの夫の姿が消えた。老夫婦はメメが持ち主に引き取られていつて、庭での遊びが終つたのだらうと、ほつとして、眠りに着いた。翌朝、老夫婦は茅に隠れたメメを見た。腰丈に折れた茅の根本で蹲つてゐる。メメは持ち主に引き取られていつたのではなかつた。夜を通してそこにいつたのだ。ユウの夫の姿がない。老夫婦は家の中を調べた。いない。茅の間に埋もれてはいしないかと、庭を探す。ユウの夫の姿はどこにもない。メメは相変わらず蹲つてゐる。ふと見た老夫婦の目に、メメの顔の下の塊が映つた。塊は脇を下にして臥せつてゐる息絶えたユウの夫だつた。もがき苦しんだかのように茅の葉が窳り取られてゐる。メメがその顔に口を付けて離れない。ユウの夫は微風の快い日の宵、あるいは夜半、庭で死んだ。あの日の様子を語り終えた老夫婦の顔に疲れが見える。いつの間にか朝の薄い光が窓に忍び寄つていつた。

わたしは明け切らない庭を眺め廻し、父をあの世へ送つた茅の辺りへ目を凝らす。父は誰にも看取られず、俗世間を逃れた安楽な地でもがき苦しみたつた一人で死んだ。心

——最初のメメが早い頃に老衰で死んで、次にやつて来た馬もメメと名付け、一頭目のメメの身代わりとして夫婦は子供の成長を見守るようになつた。可愛らしい目をするからと、娘がその名を付けたと聞いている、といつて老人はわたしに優しい目を向けた。メメは栗毛の体高一四〇センチにも満たない小形の馬で、わたしにも父にもなつていつた。とくに生の草が好きで、その中に人参が入つていつた。いと催促するように待つてゐる。そのメメが死んだ。幼いわたしを鞍の上に載せたあの時のメメが父の理想郷で死んだ。二頭目のメメも、老いていながら病氣もせず、あの日もユウの夫の相手をしていつたと、老人は父の最期の日の様子を話し始めた。

微風の快い朝。メメが枯れた茅の庭を走つていつた。ユウの夫もメメの後ろを歩いたり走つたりした。疲れると庭の隅の枯れた雑草の上にごろりと横になつた。メメがその顔を覗いた。一緒に走れといふ催促だ。よし走るぞ、とばかりにユウの夫はメメの後ろを走つた。心臓が悲鳴を上げ、腰に痛みが走り、体がくず折れる。枯れた茅の間に頭を入れたり出したりしてゐる離れた場所のメメを見ながら痛む腰を擦る。そこに何かがあるのかな、メメ。何か聞こえるのかな、におうのかな。そこで遊んでいておくれ。メメが寄つてきて、顔を寄り寄せる。追うと、ごろりと寝転んだりする。メメが跳ね起きて茅の庭を走り廻る。その後からユ

の支えのユウを死に追いやり、周囲の人々から疎外され、残してきた娘に会うことも適わず、心を打ち明けられるのはたつた一頭の馬だけ。思いのままに生きてきた父の死の床は皮肉にも冷たい土の上だつた。父に取つてこの地は楽土だつたか。苦しみがなくて、楽しく暮らせる土地、楽土。この世に楽土などありはしない。この世は世間の掟やしきたりなどの制限内で生きてゐる俗人たちの住む厳しい世界だ。どこまでいつても俗人の住む世界に楽土はない。好きな人との理想的な暮らしの中で父は往事を偲んでいつた。もし父に理想郷があつたとすれば、なみなみとした川音川の水の見える県西部の酒匂川左岸、蜜柑の山に囲まれた気候の良い平野部、働き者の妻とその娘の住んでゐる家、そこではなかつたか。そこが父の理想郷ではなかつたか。父はわたしの来るのを待つていつた。妻子のいる家がどれほど心地よい場所であつたかも見えずに……。といつたといふ父の最後の言葉がわたしの脳裏に染み付いて離れない。水平線が真っ赤に染まり、辺り一面輝いた。日の出だ。輝く太陽がわたしの顔を赤く染め、胸の重い塊を解かした。わたしは塊の解けた身で、決して脳裏から離れることのない父の、その手をしっかりと握り締め、大室高原理想郷の坂を下る。

受賞の言葉

来の宮あんず

記憶は生き物のようです。たった今まぶたに映ったかと思ふと次の瞬間には逃げており、そしてまた思い掛けないときに姿を見せたりするのです。それだけではなく、不思議なことに必ず、何者かを伴って現れます。湯河原のバス停の「理想郷」という表示板の文字を目にし、動けなくなつた時から、折に触れ現れたり消えたりしつつ三十年が経つていました。記憶はわたしをそのバス停へ案内した父を伴って現れました。

「こんな思い切つた名を誰がつけたのかしらね」

「さあ、誰だろうな」

「何が理想郷なのかしら。こんな変哲もないところが……」

「それらしきところがどこかにあるのだろう。そのうち探してみるといい」

今はこの世にいない父との会話でした。「父の理想郷」というわたしの小説を父がああ世で読んだならば、父は、小説の中の父と自分が混同し、きつとこういうでしょう。へんなことを書くなよ、と。

突然現れる気まぐれな記憶を逃すことなく、しっかり捕まえて、ピンポイントに絞つたテーマを胸に秘め、短編小説を作つていこうと思います。

私の作品を真剣に検討して下さつた選考委員の先生方に、厚く御礼申し上げます。



来の宮あんず

きのみや あんず

神奈川県生まれ

1952 大谷学園卒業 現、横浜高等教育専門学校
後、婦人服デザインを専門に学ぶ

63 大手既製服会社の婦人服デザイナーを勤める
その後フリーになる

87 実用書「サンデーエブロン」を出版。

この時の経験、得難く、後「短編小説」に向かう。

90 都内「小説教室」の同人となり、3年間授業
を受ける。

2007 「石の鷲」で第4回銀華文学賞奨励賞受賞

08 「旅の人」で第5回銀華文学賞優秀賞受賞

その他、小説に「二十六夜の月の出」「千花の壁」
などがある

東京都江東区在住

